

アジア・アフリカ言語文化研究所
東京外国语大学

要覧 1989



目 次

概 要

歴史と性格	1
組織	2
職員	4
研究部門構成	6

研究活動

共同研究プロジェクト	7
共同研究員(公募)	15
研究生	15
言語情報機械処理	16
言語研修	17
海外学術調査	18
助手等の現地投入	19
外国人研究員	20

施 設

電算機室	23
図書室	24
音声学実験室	25
出版物一覧	26

—表紙写真説明—

ソ連邦の西の端、バルト海のほとりに北からエストニア、ラトビア、リトアニアの順に並ぶ「バルト3国」は、いずれも両大戦間期には独立国であった。3つのソビエト共和国は、それぞれエストニア語、ラトビア語、リトアニア語の話されている地域にはほぼ対応する。このうち、ラトビア語とリトアニア語は、ともにインド・ヨーロッパ語族のバルト語派に属し互いに姉妹関係にあるが、エストニア語はウラル語族に属し、フィンランド語の姉妹語である。

エストニア・ソビエト社会主义共和国の首都タリンの郊外には野外博物館があって、エストニア各地から集めた農家などの伝統的な木造建築物が見られるほか、夏の観光シーズンには、観光客向けに伝統的な音楽やダンスが披露される。楽器は、アコーディオン、バイオリン、カンテレ（琴に似た弦楽器）、バグパイプなどである。
(松村 一登)

概要

歴史と性格

アジア・アフリカ言語文化研究所は、人文科学・社会科学系では、わが国ではじめての共同利用研究所です。

本研究所の目的はアジアおよびアフリカの言語文化に関する総合研究、これらの地域における諸言語の辞典編纂、および教育訓練を行うことになります。

すなわち：

- 1) アジア・アフリカの言語、およびそれを通じて、これらの地域の歴史・社会・文化を直接研究すること。
- 2) それらの言語による資料の利用を容易にするための辞典を作ること。
- 3) それらの言語習得を助けるため、言語研修を実施すること。

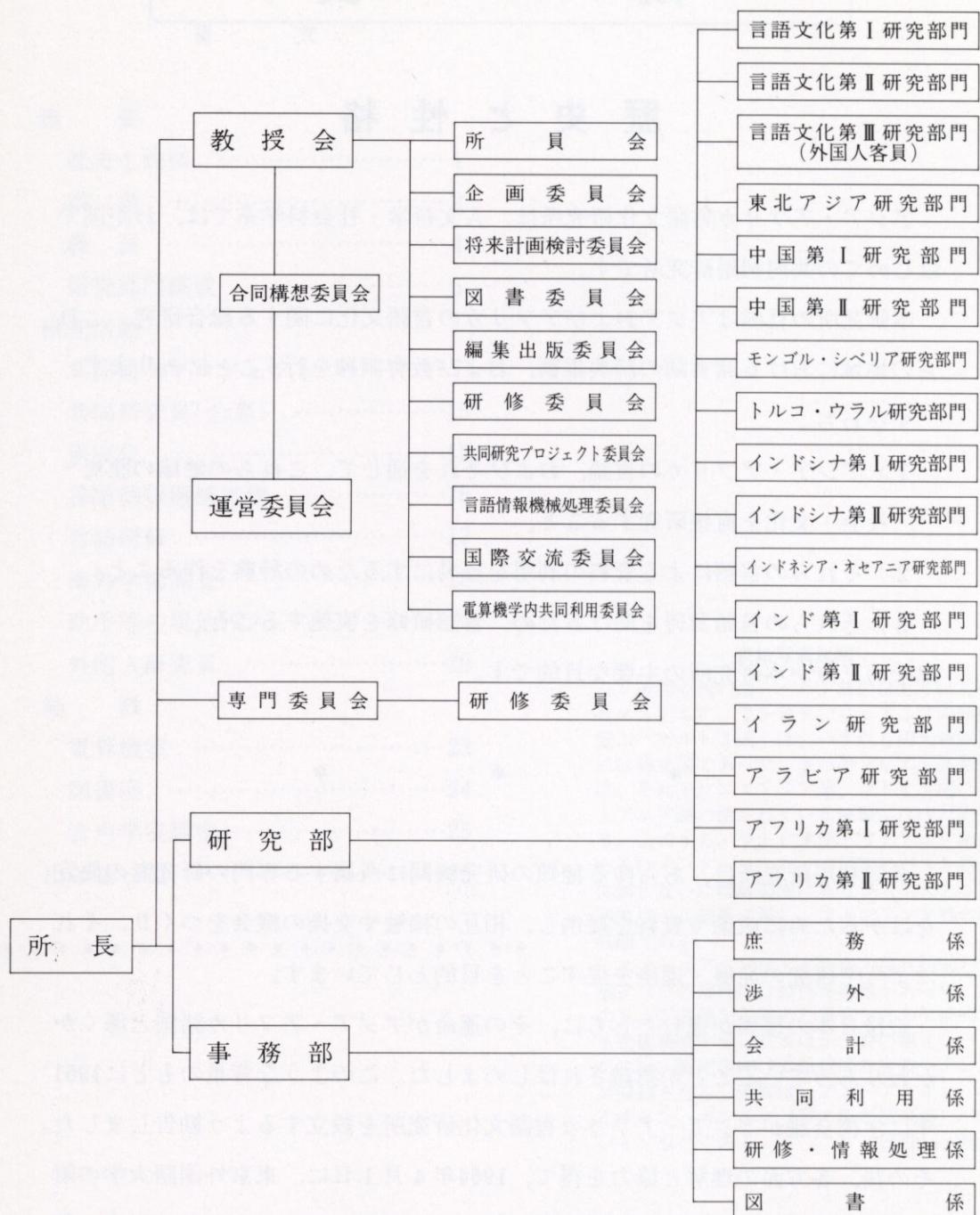
以上の三点が本研究所の主要な目的です。

* * *

共同利用研究所は、あらゆる種類の研究機関に所属する専門の研究者の便宜をはかるために設備や資料を提供し、相互の接触や交換の機会をつくり、それによって研究の発展・進歩を促すこと目的としています。

戦後日本の復興が進むとともに、その運命がアジア・アフリカ諸国と深くかかわりあっていることが認識されはじめました。このような背景のもとに1961年に学術会議がアジア・アフリカ言語文化研究所を設立するよう勧告しました。その後、各方面の理解と協力を得て、1964年4月1日に、東京外国语大学の附置の共同利用研究所として本研究所が設立されることになりました。以来、整備拡充が進み、今日では17部門の研究所に成長しました。

組 織



(1989年4月1日現在)

区分	教 授	助 教 授	講 師	助 手	その他の職員	計
定 員	(2) 16	16	0	8	29	(2) 69
現 員	(2) 15	13	0	8	29	(2) 65

() は外国人客員数を外数で示す

運 営 委 員 会

研究所の日常の業務の運営は、教授・助教授で組織する教授会において行われますが、共同利用研究所としての公開性を保つため、これとは別に運営委員会が置かれ、研究所の運営の基本方針などの重要な事項について、所長の諮問に応えます。運営委員には研究所の教授・助教授、および所外の学識経験者など、25名以内が委嘱されます。第13期(1989.2~1991.1)の運営委員は現在以下の通りです。

池 田 修	大阪外国语大学教授	田 町 常 夫	福岡工業大学教授
石 井 米 雄	京都大学 東南アジア 研究センター所長	中 根 千 枝	(九州大学名誉教授) 東京大学名誉教授
石 川 榮 吉	中京大学教授	中 村 平 次	所 員
伊 谷 純一郎	京都大学アフリカ地域 研究センターセンター長	西 田 龍 雄	京都大学教授
大河内 康 憲	大阪外国语大学教授	原 忠 彦	所 員
上 岡 弘 二	所 員	本 田 實 信	名古屋商科大学教授 (京都大学名誉教授)
神 田 信 夫	明治大学教授	三根谷 徹	國學院大学教授
北 村 甫	麗澤大学教授 (東京外国语大学名誉教授)	護 雅 夫	(東京大学名誉教授) 日本大学教授
興 水 優	東京外国语大学教授	矢 内 原 勝	(東京大学名誉教授)
佐々木 高 明	国立民族学博物館教授	山 崎 利 男	慶應義塾大学教授
鈴 木 犢	東京外国语大学教授	渡 部 忠 世	東京大学東洋文化 研究所教授
祖父江 孝 男	放送大学教授		放送大学教授
谷 泰	京都大学人文科学研究 所所長		(京都大学名誉教授)

専 門 委 員 会

また、所長の諮問に応えて、研究所の共同研究に関する専門的事項を審議する専門委員会があり、委員は所外の学識経験者のうちから委嘱されます。1989年度の委員は以下の通りです。

研修委員会

池上二良(札幌大学教授、北海道大学名誉教授)、池田修、大河内康憲、大東百合子(明海大学副学長)、小澤重男(東京外国语大学名誉教授)、北村甫、興水優、柴田紀男(天理大学教授)、鈴木犖、西田龍雄

職 員

所長（併）山 口 昌 男

研究部（五十音順）

教 授

梅田博之：朝鮮語

大江孝男：朝鮮語

岡田英弘：東アジア史

上岡弘二：イラン語、イスラムの民間信仰

川田順造：アフリカ文化

坂本恭章：アウストロアジア諸語

中野暁雄：アフロ・アジア諸言語及びその民族誌

中村平次：南アジア現代史

奈良毅：インド・アーリア諸語

永田雄三：トルコ史

原忠彦：イスラム教徒文化社会

日野舜也：アフリカ都市社会の比較研究

家島彦一：インド洋・地中海における中世交易港の比較研究

山口昌男：文化記号論

湯川恭敏：理論言語学、バントゥ諸語

助教授

池端雪浦：現代フィリピン政治と宗教

石井溥：南アジアの人類学

加賀谷良平：音響音声学、アフリカ諸言語

梶茂樹：バントゥ諸語

新谷忠彦：言語哲学

内藤雅雄：インド近・現代史

中嶋幹起：漢語

中見立夫：内陸・東アジアの国際関係史

羽田亨一：サファビー朝文化史研究

松下周二：アフリカの言語

水島司：南インド近・現代史

森幹男：インドシナ比較文化史

守野庸雄：日本語・スワヒリ語対照研究
およびス・ス辞典編纂

助 手

栗原浩英：ヴェトナム現代史

栗本英世：東・北東アフリカの人類学

高知尾仁：世界表象と象徴性

中澤新一：チベット仏教の人類学的研究

林徹：トルコ語

松村一登：フィン・ウゴル諸語

峰岸真琴：インドシナ諸言語

宮崎恒二：インドネシアの諸社会

子守りをするサンタル人の少女（インド、ビハール州シンプムにて）。

（峰岸真琴）



事務部

事務長 山本唯雄
文部事務官

事務長補佐 渡邊仁
文部事務官

庶務係

係長 田川恵二
文部事務官
文部事務官 神田環
文部事務官 谷川かつ子
文部事務官 元井洋一
文部技官 堀和雄
(自動車運転手)

会計係

係長 山本芳久
文部事務官 乙訓寛雅
文部事務官 藤崎英朗
文部事務官 佐伯季之
用務員 植田カツエ

研修・情報処理係

係長 平井榮治
文部事務官 中嶋弘子
文部事務官 伊藤宜司
文部技官 今井健二

涉外係

係長 佐久間敬喜
文部事務官
主任 岡田ほなみ
文部事務官 堀 浩

共同利用係

係長 浅見義則
文部事務官 金井京子
文部事務官 津田貞子
文部事務官 大村和子
文部事務官 斎藤眞一郎

図書係

係長 隅田浩
文部事務官 中川陽子
文部事務官 鈴木喜久子
文部事務官 須郷知子
文部事務官 栗瀬篤司



アラドスの子供たち。シリアのタルトゥース沖合に浮ぶ小島アルワード(アラドス)は、紀元前10世紀以前から地中海の〈海の民たち〉の根拠地となっていた。
(家島彦一)

研究部門構成

研究部	研究部門 (開設年度)	研究分野または対象とする言語文化
一般	言語文化第Ⅰ (1964年度)	一般言語学理論・文法記述理論・語彙記述理論・コンピュータ言語学・一般音声学理論・音素論・音声実験理論など
	言語文化第Ⅱ (1967年度)	民族学・歴史学・地理学など
	言語文化第Ⅲ (外国人客員研究部門) (1979年度)	言語・文化、民族学、歴史学、地理学等の分野における、特に現地人研究者又は現地研究の欧米専門家との共同研究による地域研究法の開発
東アジア	東北アジア (1966年度)	朝鮮語・ツングース語(満洲語・その他のツングース語)・極北諸語(チュクチ語・ユカギル語・ギリヤーク語・アイヌ語など)および文化
	中国第Ⅰ (1968年度)	中国諸方言(北京語・吳語・福建語・廣東語・客家語など)および文化
	中国第Ⅱ (1979年度)	チベット語(現代チベット語・チベット文語など)・イ語(ロロ語)・チュワン語・回族の諸言語などおよび文化
北および中央アジア	モンゴル・シベリア (1982年度)	モンゴル諸語(ハルハ方言・ブリヤート方言等)・カルムイク語・モングオル語・ダグール語・モゴール語および文化
	トルコ・ウラル (1971年度)	チュルク諸語(トルコ語・オスマン語・ウイグル語・ウズベク語・タタール語・チュヴァシ語・ヤクート語など)、ウラル諸語(フィンランド語・エストニア語・ハンガリー語・サモエード諸語など)および文化
東南アジア	インドシナ第Ⅰ (1964年度)	ベトナム語・タイ語・ラオス語などおよび文化
	インドシナ第Ⅱ (1969年度)	ビルマ諸語・モン語・カンボジア語などおよび文化
	インドネシア・オセアニア (1967年度)	インドネシア語(マライ語)・ジャバ語・タガログ語・ビサヤ語・マラガシ語・メラネシア諸語・ポリネシア諸語・パプア諸語などおよび文化
南アジア	インド第Ⅰ (1965年度)	ヒンディー語・ウルドゥー語・ベンガル語・マラーティー語・グジャラーティー語・シンハリー語・サンスクリット語・バーヒー語などおよび文化
	インド第Ⅱ (1978年度)	ドラヴィダ諸語(タミル語・テルグ語・カンナダ語・マラヤラム語)・ムンダ諸語および文化
西アジア	イラン (1972年度)	ペルシア語・クルド語・バルーチー語・パシュトー語・アルメニア語・グルジア語などおよび文化
	アラビア (1966年度)	イラク方言・シリア方言・エジプト方言・マグレブ方言・アラビア文語・ヘブライ語(現代ヘブライ語・旧約ヘブライ語)・アラム語・アムハラ語などおよび文化
アフリカ	アフリカ第Ⅰ (1964年度)	スワヒリ語、キクユ語、ガンダ語、ルワンダ語、スクマ語、ベンバ語、ショナ語、ズル語、コサ語、ウンブンドウ語、コイサン語、ソマリ語、ガラ語、ティンカ語などおよび文化
	アフリカ第Ⅱ (1987年度)	ハウサ語、フラニ語、ウォロフ語、バンバラ語、メンデ語、アカン語、ヨルバ語、イボ語、カヌリ語、サンゴ語、ファン語、リンガラ語、コンゴ語、モンゴ語などおよび文化

研究活動

共同研究プロジェクト

共同利用研究所での研究は、所員が個人研究テーマを持って研究を行うとともに、所外の研究者と協力することになっています。そのために共同研究員の制度があり、共同研究プロジェクトを組織し、研究を進めています。1989年度のプロジェクトの研究計画と共同研究員は以下の通りです。

なお()内は研究代表者です。

言語研修 (大江孝男) 所員 24名

本年度に予定する事業及び研究活動は次の通り。

1. 研修講座：実施対象言語—東京会場：ベンガル語、ベトナム語；大阪会場：アラビア語
2. 専門委員会2回（元年5月、2年3月）、研修実施に関する成果報告・検討のための専門委員・共同研究員合同会議1回（元年10月）
3. 研修教材作成と研究連絡のための研究会：東京・大阪各2回（計4回）
4. 自動化研修のための電算機補助プログラム開発班の研究会：東京3回（元年6月、9月、12月）

上記の計画によって、前年度に引き続き本研究所の言語研修に関する諸問題を検討するとともに、日本語との対照研究を通じて対象言語の特徴を把握し、教材と方法などの改善に役立てる。検討すべき課題は、①研修のあり方、②実施言語の選定と計画の検討、③実施方法（カリキュラム、テキストの構成、指導・訓練の方法、効果の測定、評価の方法、など）、④自動化研修の実現と利用に関する研究（自動化可能な範囲、実施可能な事業、プログラムの開発、必要な施設の検討、など）。

大坪一夫	加藤 栄	高階美行	福原信義
高田美佐子	吉田元夫	竹田 新	藤井章吾
吉川武時			

辞典編纂プロジェクト (梅田博之) 所員 7名

アジア・アフリカの諸言語の言語資料を蒐集、機械処理し、それに音韻論的、辞学的、形態論的、統辯論的分析を施し、これらの言語の辞典の編纂にそなえる。

北村 甫	讚井唯允	辻 伸久	宮脇淳子
慶谷壽信	武内紹人		

アフリカにおける都市化の比較研究 (日野舜也) 所員 8名

本研究は、現代アフリカにおいて進行する最も大きな社会変化である都市化と地域形成の問題を、国民社会の形成、都市社会の構造、都市・村落関係の展開、地域共通文化の機能、リングアフランカの機能などとの関連において長期の、継続的比較調査をおこない、その資料にもとづいて動態的に解明しようとするものである。

今年度は、科研による現地調査（第二期第一次）をおこなう。

赤阪 賢	小倉充夫	富永智津子	宮治美江子
阿久津昌三	門村 浩	中村孚美	米山俊直
上田 将	小馬 徹	端 信行	和崎春日
江口一久	嶋田義仁	福井勝義	和崎洋一
大森元吉	店田廣文	前山 隆	渡部重行
小川 了	富川盛道	松田素二	和田正平

南アジア諸言語の研究とそのデータベースの作成 (奈良 毅) 所員 3名

本年度は、前年度に入力したデータベースを利用し、ベンガル語、ヒンディー語、パンジャーブ語、カンナダ語、タミル語、サンタル語、カスィ語、ルシャイ語等の言語分析を行う。

研究連絡打合せ会を1回(5月下旬)と研究発表会を1回(6月下旬)ずつひらく。研究発表論文をまとめた論文集シリーズその1 (Studies of South Asian Languages—SSAL) と8言語の基本語彙集シリーズその1 (Basic Vocabulary of South Asian Languages—BVSAL) を刊行する。

内田紀彦	林 典門	町田和彦	溝上富夫
坂田貞二	藤井 毅	三上直光	蔽 司郎
サロージ・K・チャウドリ			

イスラム圏における異文化接触のメカニズム (家島彦一) 所員 7名

イスラム圏はその歴史的展開と地理的大拡大の諸過程において、さまざまな社会・文化・生態との接觸・共存と融合を達成し、相互の矛盾・衝突をはらみつつ、同時に一つの共通文化圏としての世界を形成した。本プロジェクトは、そうした多重・異質と統一・均質の二元的性格をもったイスラム圏の社会・文化にみられる接觸のメカニズムを総合的に捉えることを目的としている。その目的にもとづいて、具体的研究テーマを「市(sūq/Bāzār)の比較研究」と設定した。イスラム圏における市の果たす社会経済的、文化的機能、中立地としての場の構造、ネットワークを通じての他世界との接觸について、その歴史的展開と現代における変容過程、イスラム圏外の市との比較研究、地理学、社会学、農業経済や都市問題の立場など、多分野からの学際的研究を深めたいと考えている。

本年度は第3年度目をむかえるが、第1～2年度に引き続き、年2～3回の研究会を予定している。とくに、分野・地域・時代と研究方法を異にする研究者を選び市研究の課題や方法についての議論を深めていく。また、これまでの研究発表・討論の成果をまとめたプロジェクト報告『イスラム圏における異文化接觸のメカニズム』

ム——市の比較研究——』第2巻目を出版する予定である。

赤阪 賢	後藤 明	関本照夫	松木栄三
麻田 豊	斎藤寛海	柘植洋一	三浦 徹
石原 潤	斎藤美津子	奴田原睦明	三木 亘
太田敬子	坂本 勉	信岡奈生	宮治美江子
川瀬豊子	佐藤次高	浜畠祐子	森川孝典
川床睦夫	真田 安	原 隆一	山形孝夫
私市正年	蔀 勇造		

インド・アーリア-チベット・ビルマ系文化の接触・変容の研究 (石井 淳) 所員 3名

ヒマラヤ周辺地域の諸住民を主対象とし、

- 1) インド・アーリア系の言語・文化を基層としてもつ人々の文化・社会が、チベット・ビルマ系の言語・文化と接触することで、どのような影響・変容をこうむってきたか。
- 2) チベット・ビルマ系の言語を母語とする様々な民族が、インド・アーリア系言語・文化、およびチベット系文化をどのように吸収、消化し、民俗文化と融合させてきたか、以上の両面を文化、社会、言語等の面から研究する。

当面は1年に1~2回研究会を開き、その後、海外調査を計画する。

出版物はMonumenta Serindica, YAKのシリーズの刊行を続ける。

飯島 茂	鹿野勝彦	立川武藏	星実千代
糸永正之	北村 甫	長野泰彦	三瓶清朝
永ノ尾信悟	島 岩	西 義郎	山本勇次
奥山直司	諏訪哲郎	藤井知昭	結城史隆

象徴と世界観の比較研究 (山口昌男) 所員 4名

アジア・アフリカおよびアメリカの土着社会の説話・神話・儀礼などを、特に時間・空間観念との関連において研究し、この領域における比較研究及び民族学、神話学・言語学的諸分野間の方法論的接合点を探る。

青木 保	小松和彦	野村雅一	山下晋司
上野千鶴子	中村雄二郎	福島真人	横井 清
大隅和雄	西村 康	松岡心平	渡辺公三
小川 了	野田正彰	宮坂敬造	
落合一泰			

アジア・アフリカ諸言語の比較・対照研究 (奈良 毅) 所員 17名

アジア・アフリカ諸言語の文法ならびに音韻構造を、同系統の他言語との比較あるいは他系統の言語との対照によって明らかにするため、文法部会、音韻部会をそれぞれ会合を開いて研究発表・討議を行う。

刊行物としては、共同研究プロジェクト報告(通称年報)1冊と文法便覧2冊の予定。

伊豆山敦子	柴谷方良	中井幸比古	溝上富夫
岩田 礼	柴田紀男	長 弘毅	三谷恭之
内田紀彦	下宮忠雄	中島 久	宮岡伯人
上野善道	杉田 洋	繩田鉄男	村崎恭子
大島 稔	杉藤美代子	新田哲夫	森口恒一
奥平龍二	高階美行	橋本 勝	蔽 司郎
小田真弘	田村すず子	早田輝洋	山田幸宏
切替英雄	塚本明廣	原 誠	吉川 守
金 東俊	辻 伸久	福井 玲	アミール・モハバット
近藤達夫	土田 滋	福田権一	カリヤン・ダスグプタ
坂本比奈子	角田太作	福原信義	ツイオン・ベン・シムエル
崎山 理	富田健次	益子幸江	

第三世界と日本 一現状と展望一 (中村平次) 所員 4名

この共同研究はテーマの示す通り、今日の第三世界と日本の相互関係を特に最近の局面に関心を集中して究明し、その問題点を明らかにしようとする。以下にその特徴点を共同作業を進めるにあたり指摘しておく。

第1に、現代日本研究者の参加を得て、日本の現状認識を深める上で、その国際的な諸契機の所在の確認が要請されていると考える。そのために、政治・経済・思想の諸分野を包括する。

第2に、東アジアから中東・アフリカに及ぶ諸研究の問題関心を整理し これら諸地域と日本との史的な関連と問題点を摘出する。この他、欧米・西欧・ソ連研究者も加わり、グローバルな視角から、主題の解明を試みるものとする。

第3に、本研究は文字通り、インター・ディ・シ・プリナリーなアプローチを志向しており、主題に関する討論と討論成果の面で、相互に益するところもまた少くないと考えている。

第4に、本研究プロジェクトは3年間に及ぶ計画であるが、各年度末に研究成果を出すのではなく、最終年度に成果刊行を考慮している。

金子 勝	桐山 昇	富永智津子	毛里和子
神田文人	古賀正則	羽場久混子	油井大三郎
木畑洋一	後藤政子	文 京洙	吉村慎太郎
木村英亮			

「未開」概念の再検討（川田順造） 所員 3名

「未開」の概念は「文明」との対比で、民族学・文化人類学にとって基本的な重要性をもってきたが、その概念の形成された文化的、思想的背景とその内容、研究概念としての有効性等については、十分な検討がなされていない。この共同研究では、

①文化史的発展段階としての「未開」と、思考構造上の「異界」としての「未開」；
②技術の文化と価値の文化、あるいは「未開」と「低開発」の関係；
③日本をはじめとするアジア、および欧米も対象に含めての「未開」の位置づけ；等の点を重視して、学際的に研究をすすめる。63年度までは通算6回の研究会を行い、「未開」概念形成の歴史的背景、「異界」としての「未開」世界、先史学・民族学・民俗学・歴史学からみた「未開」概念、進歩の概念と「未開」概念等について検討した。平成元年度には、歴史学・民俗学・民族学の研究領域相互の関係の中での「未開」概念、「未開」と「低開発」の関係を中心として共同研究を行う予定である。

阿部謹也	大林太良	竹沢尚一郎	保坂実千代
阿部年晴	金子春美	谷 泰	堀内 勝
網野善彦	樺山紘一	田村善次郎	松園萬亀雄
綾部恒雄	小西正捷	塙本 学	松田素二
安溪遊地	小松和彦	徳丸吉彦	宮廻和男
伊藤亜人	坂井信三	二宮宏之	宮田 登
伊東俊太郎	坂部 恵	野村純一	安丸良夫
上田 篤	陣内秀信	野村雅一	山本吉左右
応地利明	住谷一彦	船曳建夫	渡辺公三
大貫良夫	関本照夫	古橋信孝	若桑みどり

南アジアにおける社会集団形成過程に関する研究（内藤雅雄） 所員 4名

南アジアの社会は例外なく多民族的多言語的である。しかもそこに宗教やカーストなどの要因が加わり、一口に社会集団といっても内容的には極めて多様である。従って南アジア社会をより深く理解するためには、これらの諸要因を地理的、歴史的諸条件と対応させつつ、緻密に検討することが求められる。本研究はそうした考察への準備的作業として、社会学、経済学、歴史学、人類学、文学など多面的分野から南アジア社会のあり方に迫ろうとするものである。具体的テーマとして次のようなものが挙げられる。スリランカにおける社会変動と宗教・カースト、民衆文化とエリート文化の交差のあり方。バングラデシュにおける居住区の分類と人間関係の歴史的变化の考察。インドに関しては、植民地下での社会、政治運動における参加者の結合原理、植民地下インドの社会変容とカースト関係の変化、不可触カーストの経済的地位の変化とその運動との関連、インドにおけるいわゆるエスニック問題の政治・経済・宗教的側面からの検討、現代インドの言語集団と政治の関わり、インドにおけるヒンドゥー・ムスリムの歴史的関係とコミュニナル暴動の関連、文学に現われるカースト諸関係。海外インド人コミュニティーの諸問題など。

石田英明	河合明宣	鈴木正崇	柳沢 悠
岡寄佐代子	佐藤 宏	長谷安朗	サンタジラン・カディルガマル
辛島 昇	渋谷利雄	藤井 毅	

東南アジア研究基礎資料のデータベース化に関する基礎研究 (坂本恭章) 所員 6名

1. 東南アジア（言語文化）研究のためにデータベース化する必要のある基礎資料（碑文、年代記、民俗誌、言語学的及び文化人類学的現地調査の報告など）を調査し、その必要性、緊急度のランク付けを行う。
2. それぞれの資料について、データベースとして有効に使用できるためには、どのような形態のデータベースでなければならないかを研究する。
3. 将来、この基礎研究の成果に基づき、実際のデータベース作成を目標とする。

石井米雄

石沢良昭

奥平龍二

西アジア研究資料のデータベース化に関する基礎的研究 (永田雄三) 所員 6名

- (1) 西アジアの歴史・地理・言語・政治・経済に関する資料（碑文・年代記・地図・地理書・伝記集・写本カタログ・統計資料・考古学的・社会人類学的調査報告等）のうち、データベース化に適した基礎資料の選定。
- (2) 選定された基礎資料のデータベース化の形態の決定。
- (3) (2)において形態の決定された基礎資料を将来データベース化する。

岡崎正孝

北川誠一

鈴木 董

内藤正典

岡田恵美子

佐藤次高

関根謙司

湯川 武

小野 浩

清水宏祐

アジア遊牧民の歴史と言語 (岡田英弘) 所員 4名

アジアの全体史像を構築するに当って問題となる諸要素の一つは、内陸地域に広く散在する遊牧民の歴史的役割である。しかしその解明は史料の制約と用語・概念の未発達のために遅れた段階にある。この研究プロジェクトでは、満洲、モンゴル、トルコ、チベット、ペルシア、アラビア等の地域の歴史と言語の専門家の協力のもとにできる限り一貫した叙述の可能性を探求することを目的とし、年2回の研究会を開催する。

河内良弘

小山皓一郎

庄垣内正弘

宮脇淳子

北川誠一

佐口 透

浜田正美

森川哲雄

窪田新一

清水宏祐

樋口康一

山口瑞鳳

栗林 均

志茂碩敏

松村 潤

吉田順一

後藤 明

東南アジアの政治と文化 (池端雪浦) 所員 3名

近現代の東南アジアの政治において、文化の問題はきわめて重要であり、またその問題領域は多岐にわたっている。本プロジェクトでは諸民族、諸文化間の比較を重視しつつ、つぎのような課題をめぐって研究を進めたい。(1)政治権力の正統性(2)民族社会のアイデンティティをめぐる文化政策(3)国民統合ならびに開発と文化的少数民族問題(4)政治運動と宗教のかかわり(5)外交政治思想の土着化(6)社会

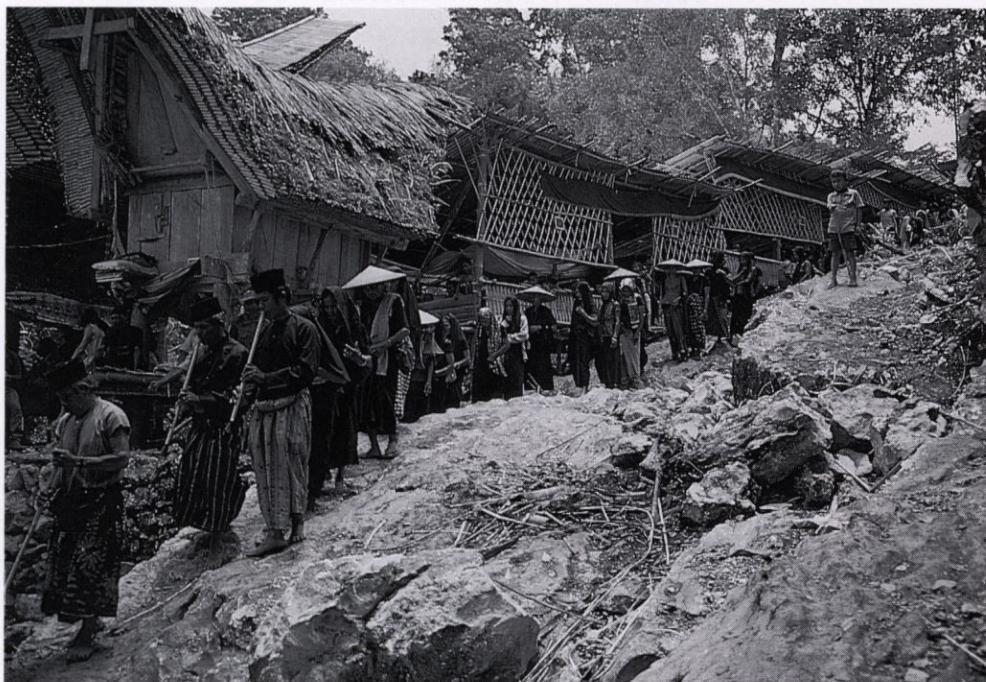
統合のプロセスにおける大衆文化の役割 (7)制度、組織、法の規範と運用の二重性。
このうち本年度は(1)(2)(3)に重点をおいて研究活動を進めたい。

赤木 攻	白石昌也	富沢寿勇	早瀬晋三
伊東利勝	関本照夫	中野 聰	弘末雅士
押川典昭	高谷紀夫	根本 敬	吉川洋子
北原 淳	土屋健治		

多民族国家における異化・同化形態の比較研究 (水島 司) 所員 3名

本プロジェクトは、多民族国家における異化・同化の形態を、地域的・学際的に比較研究するものである。共同研究では、研究員それぞれの専門領域を基礎に、異質な諸文化の接触によってもたらされる各文化自身の変容形態と、そこで新たに生成されてくる文化形態を明らかにし、同時に、異化・同化の諸過程に着目することによって、各文化の特性を抽出するようにつとめる。それらの作業を通じて、異文化接触の一般的理論を見いだすことが最終的課題である。当面、典型的な多民族国家であるマレーシアを対象として、年に2~3回の研究会をもち、課題や方法についての議論を深め、数年以内に予定している現地調査の結果も踏まえ、研究成果を逐次公刊していきたい。

小野沢純	瀬川昌久	富沢寿勇	藤本彰三
川崎有三	津上 誠	野村 亨	山下晋司
杉本 均			



トラジャ(スラウェシ、インドネシア)の葬儀

急な斜面に立つ家の周囲を切り開いて作った葬儀の会場には親戚縁者が弔問に訪れる。水牛、豚など死者への供物のリストが、大声で読み上げられる。供物の数と儀礼の規模は死者、そして生者の威信にかかわる。

(宮崎恒二)

言語文化接觸に関する研究（中嶋幹起） 所員 5名

東アジア（中国大陸）に共生する幾多の諸民族の言語は多用性に富み、その長い歴史と相俟って、多くの言語資料が集積されている。さらに、中国の開放政策により、近年は学術成果も公にされつつある。本プロジェクトでは、満洲語、モンゴル語、漢語、ウイグル語、チベット語、雲南の白語など、現地での研究体験もある、これらの諸言語の研究者が報告、討論を行いつつ、基礎的な言語研究資料を逐次刊行する。

落合守和	高田時雄	細谷良夫	横山廣子
栗林 均	辻 伸久	前川捷三	馮 良珍
黒田信一郎	津曲敏郎	村上嘉英	李 乃因
慶谷壽信	樋口康一	森安孝夫	ウィリアム・バラード
庄垣内正弘	星実千代	山川英彦	

東アジアの社会変容と国際環境（中見立夫） 所員 5名

近年における18～20世紀東アジア史研究の特色は、従来にくらべて大巾に文書史料の利用が可能となったことである。これら文書資料の状況を、体系的に把握して研究へ結びつけていくことがなによりの急務である。また関係諸国学界・研究者との交流も飛躍的に拡大するとともに、おたがいの研究の共通性と異質性もあきらかになってきた。本プロジェクトでは、18世紀より20世紀初頭の東アジア世界各地域における社会の変容が、外部世界とどのように有機的に連関していたかという問題点を、文書史料によりどこまであきらかにできるか検討する。

毎年度トピックを決め、ゲストを含めた研究会を開くとともに、研究叢刊、資料叢刊も刊行する予定である。

石井 明	江夏由樹	佐藤公彦	原山 煌
伊藤秀一	尾形洋一	中村 義	藤井昇三
井上裕正	笠原十九司	西村成雄	毛里和子
臼井勝美	佐々木 揚	浜下武志	森山茂徳



「聖ヨハネの日」と呼ばれる夏至祭は、エストニアのもっとも重要な伝統的祝祭日のひとつで、大きな火が野外で焚かれる。復活祭やクリスマスと異なり、キリスト教の教義と直接の関係がないお祭りである。
(松村一登)

共同研究員（公募）

1978年度より、共同研究プロジェクト（7ページ～14ページ）とは別に、当研究所において一定期間（2週間以上2ヶ月以内）研究を行う共同研究員を公募しています。

応募資格：大学・研究機関の研究者、大学院生、またはこれに相当する者

募集期間：4月1日～5月31日

現在までに68名を委嘱し、うち、昨年度は次の方々に委嘱しています。

氏名	所属	研究テーマ	担当教官
内田 誠		英植民地下セイロンにおける茶プランテーションの成立と労働力問題	中村平次 内藤雅雄
小倉洋子	青山学院大学大学院	日本と韓国における家族概念に関する言語文化比較	湯川恭敏 大江孝男
川口琢司	北海道大学大学院	15—17世紀ペルシア語歴史文献にみられる身分・官職用語の研究	羽田亨一
川島 緑	東京大学大学院	東南アジア基層文化における社会統合原理の基礎的研究—フィリピンにおける「血盟」に関するデータ収集を中心に	池端雪浦
保坂実千代	東京大学大学院	ニジェール川大湾曲部諸社会の物質文化の研究	川田順造
宮廻和男	筑波大学大学院	口承文芸における時間	川田順造

研究 生

大学卒業かそれと同等以上の学力のある者が研究所で研究に従事することを希望するときは、研究生として入所を許可することができます。

研究生は入所料と研究料を納付し、指定の教官の指導を受けます。

1989年度

氏名	研究テーマ	指導教官
張 志凡	日本の伝統、民俗芸能と中国演劇の関係、比較研究	山口昌男
中村智子	異類婚姻譚の比較民族学的研究	川田順造

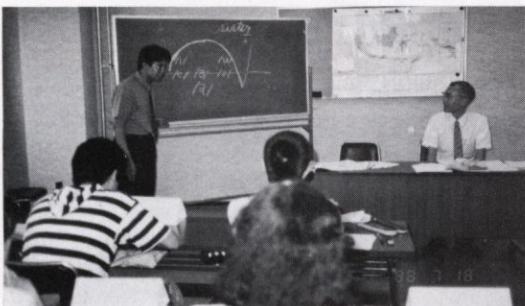
言語情報機械処理

現代の電子工学の技術と数理情報の理論を高度に活用して、アジア・アフリカの諸言語のデータを大量に機械処理し、それぞれの言語の音韻論的、辞学的、統辞論的分析はもちろんのこと歴史学的、民族学的、社会学的研究のような多目的な用途に供せられるデータベースの作製をはかっています。当研究所としては、最も重要な事業の一つであるアジア・アフリカの諸言語の辞典や文典の編纂に基礎資料を提供して、この方面におけるわが国の立ち後れを克服し、またアジア・アフリカ諸国との多面的、多角的交流という社会的要請にこたえようとしているわけですが、同時にこれは全国の研究者の共同利用にも供されます。この目的のために、一方で各言語のデータについて一定の音韻論的、統辞論的、意味論的、語彙論的情報を分析・形式化し、他方ではこれらの情報を実際の研究に使いやすいようにプリント・アウトするために、デーバナーガリー、ビルマ、ベンガル、タイ、クメール、チベット、アラビア、ハングルなどの文字フォントを作製し実際に使用しています。1988年にはモンゴルの文字フォントが追加されました。実際の言語の例としては、ベンガル語、中国語、朝鮮語、ハウサ語、フラ語、ヨルバ語、ヒンディー語、クメール語、アラビア語、ペルシア語、スワヒリ語、タイ語、チベット語、モンゴル語などのデータが蓄積されつつあります。

言語データのプリント・アウト例（左：ヒンディー語、右：モンゴル語）

अखड़ी लाहौर से बन जाय। मुस्को तो हूँटे तोते को राम—न
अखड़ी लाहौर सबूल की जाय। तो अखड़े तिक्क इतना याहात
अखड़ी लिस्म की भी शरद की तार पर लिखकर येथे। अखड़ी
अखड़ी छाई है। 'मैं डरावा हूँ, कहा तुम गरम न पढ़
अखड़ी जाह पा गये हो। मातादीन को भी किसी हाले ये
अखड़ी जाह है। जीं उकड़ाठ-बाट देवकर राम में आ
अखड़ी जानकार, अमोद-प्रमोद की जीवन का तत्त्व समझेनेवा
अखड़ी जोड़ी है। जहां याहां, सो लपण में देष लगाना है।
अखड़ी ढाई बताई है। पटवारी के कान भी जरा गरम कहा है।
अखड़ी तरह अनुभव हो गया था कि याहे निमानी ही करत
अखड़ी तरह चूपे छोड़ते थे। उसे छँ रुपए बेतने लिया
अखड़ी तरह समझ लेना याहाता था। अगर अपनी जीत हो
अखड़ी तरह बिका बानते हैं। मेस्तने तो कहकरा मारा—न
अखड़ी तरह। यज जैसा भोका देखा, देखा बन गया। 'तो
अखड़ी थी और ऊपर एक भूल लाई हुई थी। इसके तो
अखड़ी थी। बुध दिन शहर में रह चुकी थी, पहनना—ओड़े
अखड़ी दिल्लाहै कि अपना माल भी और उते घर तक
अखड़ी दिल्लाहै। सोचा होगा ढाई के बाहे इसी बाह
अखड़ी दिल्लाहै। किसी को लौ रुपण उपाये दे दिये हो
अखड़ी धाक थी। अगर कोई उनके हथे नहीं चढ़ा, तो व
अखड़ी न थी। इससे यह इर था कि मान न पड़ेगा।
अखड़ी नहीं ताता की पर्याय। भालो से पूछ, मैंने उनसे तेरे
अखड़ी नहीं ताता। मैं भालो—मर के भीतर अपने रुपण सुध
अखड़ी नहीं ताता; लेकिन जो कहो कि इसके लिए अपनी
अखड़ी नहीं है। लोना ने कहकरा मार कर कहा—मेरी त
अखड़ी नहीं है। इससे कि मिल रात गयी। ऐसी मैरी में
अखड़ी नहीं है, इससे कि मिल रात गयी। उन्होंने चढ़े की त्रु
अखड़ी नहीं। मिला ने दुम हिलायी—कान पकड़ता हूँ देवी
अखड़ी देवित है घर की भी समझ है, फिर भी यों यों आ
अखड़ी बात नहीं है। अब हमारे हाथ—पैर हैं, उनसे उन्हें
अखड़ी बात नहीं है, औपरी, दो रुपए देवकर राजा न ह

言語研修



上：インドネシア語



右：トルコ語

アジア・アフリカの言語の習得のための教育訓練は、わが国では開発がおくれていた分野ですが、その技術の開発のために、1967年からの7年間ほぼ毎年夏、実験的に、朝鮮語、ベンガル語、現代ペルシア語、アムハラ語、スワヒリ語、ビルマ語、福建語、チベット語の研修を、それぞれ1言語か2言語ずつ実施しました。1974年からは本格的に行うことになり、当研究所員を中心にその言語を母語とする人、および日本人研究者の協力をえて、東京（2言語）と関西（1言語）で、初級コースを下記のとおり実施してきました。

研修言語名（修了者数）

年度	東京会場	関西会場
1974	朝鮮語(10), チベット語(12)	
1975	カンボジア語(8), ベンガル語(12)	
1976	ペルシア語(10), スワヒリ語(9)	ビルマ語(5)
1977	広東語(14), マラーティー語(6)	モンゴル語(18)
1978	タイ語(12), トルコ語(12)	ペルシア語(13)
1979	ハウサ語(8), ビルマ語(14)	タイ語(7)
1980	ネバール語(14), モンゴル語(14)	ベトナム語(5)
1981	ヒンディー語(8), パシュトー語(10)	中国語中級(26)
1982	アラビア語エジプト方言(12), ハンガリー語(17)	フルフルデ語(12)
1983	チベット語(12), フィンランド語(21)	パンジャーブ語(8)
1984	ピリピノ語(タガログ語)(12), ヨルバ語(3)	トルコ語(15)
1985	朝鮮語(14), カンボジア語(10)	スワヒリ語(8)
1986	西南官話(5), タミル語(12)	ベンガル語(8)
1987	中原官話(10), タイ語(19)	シンハラ語(8)
1988	ペルシア語(10), トルコ語(16)	インドネシア語(6)
1989	ベンガル語, ベトナム語	アラビア語エジプト方言

研修生（各言語約10名）は、大学など研究機関を通じて全国から公募します。受講を認められた者は入所料、受講料を納付することになります。また、全課程を終えた人には審査のうえ修了証書が授与されます。

各コースの研修時間は1980年度までは226時間でしたが、1981年度以降は150時間で実施しています。なお電算機補助による研修プログラム（C A I）の作成について現在具体的な研究と作業が進められています。

海外学術調査

本研究所は、その性格上、アジア・アフリカの現地調査を行うことが重要な機能のひとつとなっています。これまでに当研究所の所員によって組織された海外学術調査は以下の通りです。なお()内は研究代表者です。

- (1) アフリカ部族社会の比較調査
1969年, 1971年 (富川盛道), 1974年, 1976年 (日野舜也)
- (2) ヨーロッパ東南部農村調査
1970年 (岡 正雄)
- (3) 東南アジア・ナショナリズムの形成過程における地域社会の変動
1972年 (河部利夫)
- (4) イスラム圏社会・文化変容の比較調査
1974年, 1977年, 1980年 (三木 亘)
- (5) 中国・インド文明接触地帯における自然、生態と文化に関する調査
1975年 (飯島 茂)
- (6) 南アジア河川流域米作地帯の農村社会の研究
1979年, 1981年, 1983年, 1985年 (原 忠彦)
- (7) ネパールにおける国民形成過程の人類学的言語学的調査
— ガンダキ水系諸地域住民のネパール化に関する比較研究 —
1980年, 1982年, 1984年 (北村 甫)
- (8) スーダン・サヘル地帯における移住と地域形成の調査研究
— ハウサ・フラニ語圏を中心に —
1981年, 1982年, 1984年 (富川盛道)
- (9) 環カリブ海地域における複合文化の比較研究
— アフリカ・アジア系社会・文化空間の変動過程 —
1982年, 1983年, 1985年 (山口昌男)
- (10) アラビア海・東地中海交流圏におけるイスラム基層文化の調査研究
1983年, 1984年 (三木 亘), 1986年 (上岡弘二)
- (11) バントゥ諸語の調査・分析と比較研究
1984年, 1985年, 1987年 (湯川恭敏)
- (12) ニジェール川大湾曲部諸文化の生態学的基盤及び共生関係の文化人類学的研究
1986年, 1988年 (川田順造)
- (13) アフリカにおける都市化の総合比較調査
1986年, 1987年 (日野舜也)
- (14) 南アジア諸言語の調査研究とそのデータベースの作成
1987年, 1988年, 1989年 (奈良 毅)
- (15) アフリカにおける都市化の比較調査 — とくに、地域形成・国民社会形成との
係わりにおいて
1989年 (日野舜也)
- (16) イスラム圏における市の比較研究 — 異文化接融のメカニズム —
1989年 (上岡弘二)
- (17) バントゥ諸語と若干の隣接諸語の記述・比較研究
1989年 (湯川恭敏)

助手等の現地投入



サウムラキ（タニンバル、インドネシア）の干潟にて
珊瑚礁の干潟は海への入り口、海の庭、下水、そして
遊び場。
(宮崎恒二)

アジア・アフリカの言語を自由に話し、読み、書くことができ、かつ、生活を通じてその文化を吸収した研究者を養成するために、本研究所は助手等の若い研究者を、それぞれ2年の期間、アジア・アフリカの諸国に送っています。この計画は1967年から実施され、現在までに合計24名が派遣され、そのうち2名は目下現地で研修中です。

- 1967年—1969年 石垣幸雄（エチオピア地区）、守野庸雄（タンザニア地区）
1969年—1971年 松下周二（ナイジェリア地区）、家島彦一（アラブ連合地区）
1971年—1973年 内藤雅雄（インド地区）、中野暁雄（モロッコ地区）
1973年—1975年 福井勝義（ソマリア地区）、中嶋幹起（香港地区）
1975年—1977年 加賀谷良平（ボツワナ地区）、湯川恭敏（タンザニア、ザイール地区）
1977年—1979年 石井 淳（ネパール地区）、藪 司郎（ビルマ地区）
1979年—1981年 羽田亨一（イラン、トルコ地区）、清水宏祐（アラブ連合、イラン、トルコ地区）
1981年—1983年 山本勇次（ネパール地区）、新谷忠彦（ニューカレドニア地区）
1983年—1985年 辻 伸久（中国、香港地区）、水島 司（インド地区）
1985年—1987年 中見立夫（中国、モンゴル地区）、梶 茂樹（ザイール、ケニア、ザンビア地区）
1987年—1989年 松村一登（フィンランド、ソ連地区）、宮崎恒二（オランダ、インドネシア地区）
1989年—1991年 林 徹（中国、トルコ地区）、栗本英世（エチオピア、ケニア地区）



恰幅のいい紳士の飲んでいる
のは、クワス（kvass）と呼ばれる
ビールに似た清涼飲料。夏
のロシアの典型的な街角風景
である。
(松村一登)

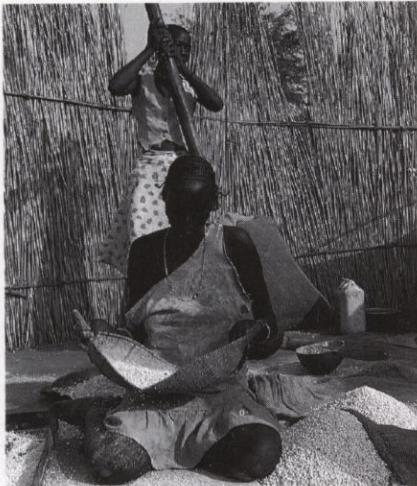
外 国 人 研 究 員

研究所は、その共同利用研究活動の一環として、外国のアジア・アフリカの言語文化研究の専門家を外国人研究員として受け入れ、研究上の便宜を供与します。現在まで受け入れられた外国人研究員は以下の通りです。

氏名	国名	専門	滞在期間
Gordon T. Bowles	(アメリカ)	人類学	1967. 10. 6 ~ 1968. 9. 15
Muhammad Ahmad Anis	エジプト	近代史	1968. 10. 2 ~ 12. 25
Ra'ūf 'Abbās Ḥāmid	エジプト	近代史	1973. 4. 1 ~ 9. 19, 1987. 7. 11 ~ 9. 10, 1989. 10. 1 ~ 1990. 9. 30
Yellava Subbarayalu	インド	南インド中世史	1973. 10. 1 ~ 1975. 10. 31
Fe Aldave-Yap	フィリピン	フィリピン国語学	1975. 9. 20 ~ 12. 21
金 完 鎮	大韓民国	韓国語学	1975. 8. 20 ~ 1976. 7. 31
Curtis D. McFarland	アメリカ	言語学	1976. 2. 20 ~ 1977. 2. 19, 1979. 10. 1 ~ 1980. 9. 30
'Abd al-Rahīm 'Abd al-Rahmān	エジプト	中東近代経済史, アラビア語学	1976. 6. 6 ~ 10. 4
Salim Abdulla Wazir	タンザニア	教育学	1976. 6. 4 ~ 10. 11
Bhakti Prasad Mallik	インド	言語学	1976. 7. 13 ~ 12. 20, 1985. 9. 30 ~ 1986. 9. 29
Karthigesu Indrapala	スリランカ	歴史学	1976. 11. 1 ~ 1977. 3. 31
俞 昌 均	大韓民国	韓国語学	1977. 4. 1 ~ 1978. 1. 31
Søren C. Egerod	デンマーク	東洋言語学, 古典学	1977. 9. 1 ~ 1978. 5. 31
Bozkurt Güvenç	トルコ	社会人類学	1978. 5. 17 ~ 10. 31, 1980. 10. 1 ~ 1981. 9. 30
Thubten Jigme Norbu	アメリカ	チベット学	1978. 6. 27 ~ 1979. 3. 31
André-Georges Haudricourt	フランス	言語学, 植物学, 民族学	1978. 10. 2 ~ 10. 31
Maria Lourdes S. Bautista	フィリピン	言語学	1978. 10. 23 ~ 1979. 5. 12
William S-Y. Wang	アメリカ	言語学, 音声学, 神経言語学	1979. 2. 15 ~ 7. 14
Alhaji Faruk Gezawa	ナイジェリア	ハウサ語学	1979. 4. 12 ~ 12. 17
Shyamsunder Joshi	インド	ヒンディー文学	1979. 5. 26 ~ 8. 25
Dor Bahadur Bista	ネパール	社会人類学	1979. 5. 30 ~ 6. 20, 1983. 5. 27 ~ 1984. 5. 26
Jean-Baptiste Bunkungu	オートポルタ・モシ語学	1979. 6. 1 ~ 9. 26	
Paul M. Thompson	アメリカ	中国哲学, 中国文学	1979. 9. 16 ~ 1980. 9. 15
Chandra Mudaliar	インド	国際関係論, 政治学	1979. 10. 1 ~ 1980. 9. 30
Udom Warotamasikkhadit	タイ	言語学	1979. 11. 6 ~ 11. 28



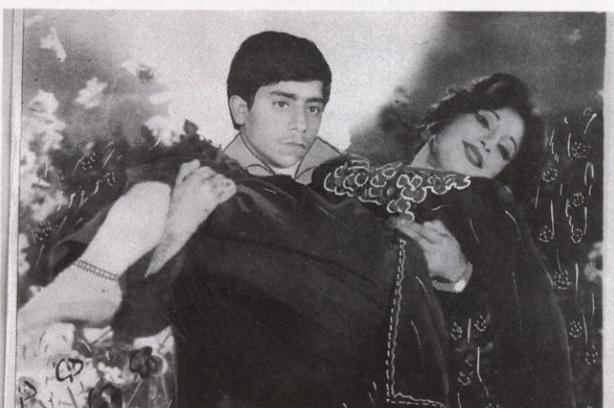
ヨグヤカルタの街角にて
照り返しのきついアスファルトの
道、絶え間ない車の流れに神経を
集中させ、行商の老婆は向こう側
に渡る。
(宮崎恒二)



トウモロコシの製粉（エチオピア、アニュワ族）：背後の女性が臼と杵でついたトウモロコシを手前では箕を使ってよりわけている。この過程を何度もくり返し、さらに水洗いや天日で乾かす作業を終えて丹精こめてできあがる粉は、機械で製粉されるものより細かくなる。それから作られる練りカユの、スムースな舌ざわりを、アニュワの人々は好むようである。1989年1月撮影。
(栗本英世)

Thomas Sebeok	アメリカ・言語学、記号学	1980. 4. 13~4. 27
傅 懋勣	中国・言語学、記号学	1980. 6. 11~1981. 3. 10
Samuel H. Elbert	アメリカ・ポリネシア諸語	1980. 10. 1~1981. 1. 31
Kripal C. Yadav	インド・歴史学	1980. 10. 1~1981. 9. 30
Alain Peyraube	フランス・中国言語学	1980. 10. 11~12. 10
徐 在克	大韓民国・韓国語学	1981. 5. 25~1982. 3. 15
Muhammad B. Mkelle	タンザニア・スワヒリ語学	1981. 6. 19~12. 18
Maurice Coyaud	フランス・中国言語学	1981. 7. 1~7. 31
William O. Beeman	アメリカ・人類学	1981. 9. 1~1982. 8. 31
Marie-Claude Paris	フランス・中国言語学	1981. 9. 12~10. 12
Talat Tekin	トルコ・古代トルコ語	1981. 9. 14~1982. 1. 11
P. A. Narasimha Murthy	インド・政治学、国際関係論	1981. 10. 1~1982. 9. 30
Yoshiro Imaeda	フランス・チベット学	1981. 10. 1~1982. 1. 16
Ernesto Constantino	フィリピン・フィリピン言語学	1981. 11. 1~1982. 10. 31
Suresh Awasthi	インド・民俗演劇	1982. 2. 1~1983. 1. 31
Sālāḥ A. al'Arabī	エジプト・アラビア語視聴覚教育学	1982. 2. 1~1983. 1. 31
Kiruja Ruchiami	ケニア・アフリカ事情	1982. 5. 1~5. 31
Mohammadou Aliou	カメルーン・フラ言語学	1982. 6. 1~9. 10
John G. Hangin	アメリカ・モンゴル言語学	1982. 9. 1~1983. 8. 31
Isidore Dyen	アメリカ・アウストロネシア比較言語学	1982. 8. 25~1983. 8. 24
Suriya Ratanakul	タイ・東南アジア諸言語、言語学	1982. 8. 28~9. 11
Tuncer Baykara	トルコ・歴史学	1982. 10. 25~1983. 1. 24
Kanchana Ngourngsi	タイ・言語学	1982. 12. 10~12. 23
Elmar A. Holenstein	スイス・普遍人類学	1983. 3. 1~1984. 2. 29
南 豊鉉	大韓民国・韓国語学	1983. 8. 11~1984. 8. 10
Alexis Rygaloff	フランス・中国言語学、東アジア言語学	1983. 10. 1~1984. 9. 30
'Ādil 'Abd al-Salām	シリア・自然地理学、チエルケス語	1983. 10. 21~1984. 10. 20
Sechin Jagchid	アメリカ・モンゴル史	1983. 9. 1~1984. 8. 31
Santasilan Kadrigamar	スリランカ・国際関係論	1983. 11. 1~1984. 8. 13

Lilia F. Antonio	フィリピン・フィリピノ、フィリビノ翻訳学	1984.3.15~1984.9.14, 1989.6.1~1990.3.31
Rajagopalan Venkataratnam	インド・医療社会学	1984. 6. 4~1985. 6. 3
Dattatreya N. Dhanagare	インド・社会学	1984. 9. 1~12. 31
朴 熙泰	大韓民国・日本語学	1984. 9. 1~1985. 8. 31
Ram Adhar Singh	インド・言語学	1984. 10. 1~1985. 9. 30
Barbara N. Aziz	アメリカ・社会人類学	1984. 10. 16~1985. 10. 15
Guillermo E. Quartucci	メキシコ・日本文学	1984. 11. 26~1985. 9. 27
黄 国營	中華人民共和国・言語学	1985. 2. 5~12. 4
Pradyumna P. Karan	アメリカ・人文地理学	1985. 10. 1~1986. 9. 30
馬 真	中華人民共和国・中国言語学	1985. 10. 1~1986. 9. 30
Metin And	トルコ・演劇学	1986. 3. 1~5. 31
韓 美卿	大韓民国・日本語学	1986. 4. 1~1987. 1. 31
Dow Mya Mya	ビルマ・歴史学	1985. 10. 1~1986. 5. 11
Shanmugam Pillai Subbiah	インド・農村地理学、社会地理学	1986. 8. 21~1987. 4. 20
Ahmet Mete Tuncoku	トルコ・国際関係論	1986. 10. 1~1987. 9. 30
James Francis Downs	アメリカ・文化人類学	1986. 10. 1~1987. 9. 30
李 荣	中華人民共和国・中国音韻論、方言学	1986. 12. 1~1987. 9. 30
賀 巍	中華人民共和国・中国語方言学	1987. 3. 1~8. 31
Kyaw Win	ビルマ・歴史学	1987. 6. 28~1988. 6. 27
Virgilio G. Enriquez	フィリピン・社会心理学、言語心理学	1987. 10. 1~1988. 9. 30
Saroj K. Chaudhuri	インド・日本語、日本文化	1987. 10. 1~1988. 9. 30
John H. Fincher	アメリカ・中国現代史	1987. 10. 1~1988. 9. 30
Urmila Phadnis	インド・国際関係論	1988. 5. 13~1989. 7. 21
特 布 信	中華人民共和国・歴史学	1988. 10. 1~1989. 9. 30
侯 精一	中華人民共和国・中国語方言学	1988. 10. 1~1989. 9. 30
Nasrin F. Hakami	イラン・社会学	1988. 10. 1~1989. 9. 30
照那斯图	中華人民共和国・モンゴル言語学	1989. 10. 1~1990. 9. 30
胡 坦	中華人民共和国・シナ・チベット言語学	1989. 10. 1~1990. 9. 30
任 洪彬	大韓民国・韓国語学	1989. 10. 1~1990. 9. 30

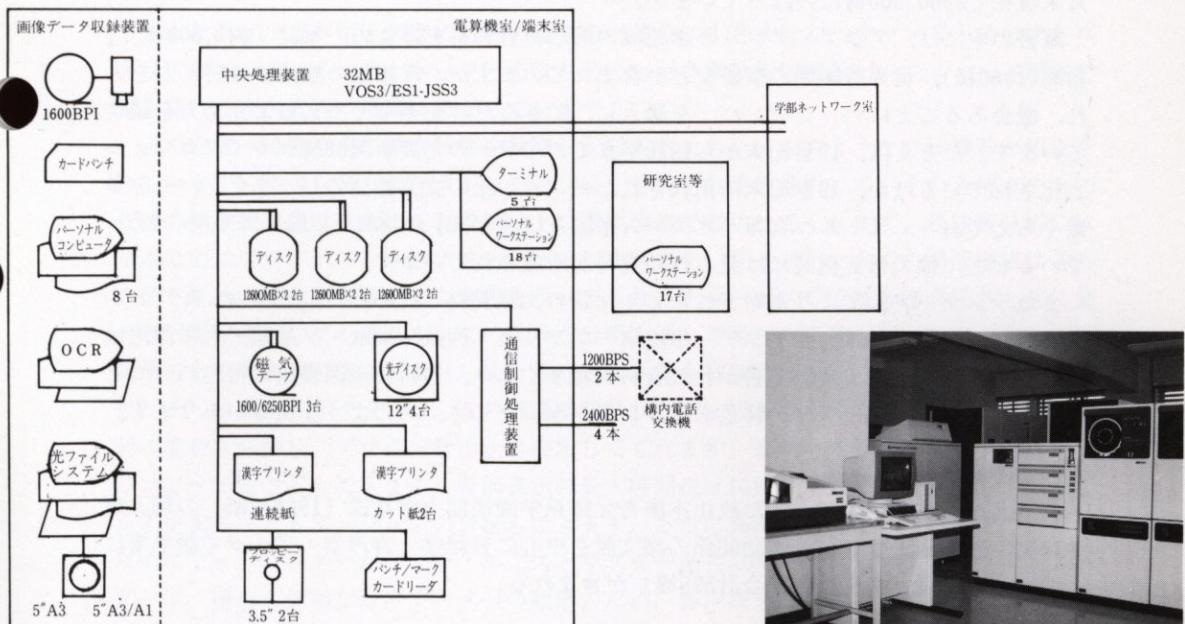


「イヤー、おれもまちじゃもてでね。これが例のラーニーよ。」などと自慢話のネタに使うのかもしれない。パキスタンはベシャワルの某写真館で撮ってくれる合成写真(カラー)。ひ弱な男にはとても抱き上げられそうにない女性の豊満さに注意のこと。豊かな肉体こそ美女の条件である。(上岡弘二)

施 設

電 算 機 室

システム構成図



当研究所では、1978年1月からHITAC M-150システムを導入し、HITAC M240Dを経て現在HITAC M-640/20システムが稼動しています。内部メモリー32MB、ディスク総容量15GB、12インチ光ディスク4ドライブ、磁気テープ3デッキ、3.5"フロッピーディスク2ドライブがあります。入力にはパンチ/マークカードリーダがあります。出力のためには連続紙漢字プリンタの他にカット紙漢字プリンタが2台あります。これを使用して、大きさも形も様々なA A諸言語の文字を印刷できるようなソフトウェアが開発されていて、国内外の研究者に利用されています。T S S端末は、電算機室には18台ですが、研究室等にも設置されています。2,400BPSの通信回線には4台のパーソナルコンピュータが接続されています。また、1,200BPSの構内電話回線が2本あります。

ソフトウェアとしては、単語の用例検索システムが準備されています。これはA A諸言語をローマ字や数字におきかえることをせずに、原字のままで入力し、データベース化するもので、必要に応じて何時でも任意の単語(列)の用例を検索し、それぞれの固有の文字で印刷することができます。このシステムは、文法研究や辞典編纂の資料作成ばかりではなく、史料や調査記録の索引を作ることもでき、言語学ばかりでなく、歴史学や文化人類学の研究にも活用できます。

オフラインの装置には、パーソナルコンピュータの他に、画像データ収録システムがあり、アジア・アフリカの固有の文字フォント作製に利用されています。また、1987年度から導入した光ディスクファイルシステムが2台あり、印刷された大量の資料を登録して、隨時必要なページを参照できるようになっています。さらに、1988年度にOCRを導入し、ローマ字系テキストについては、短期間に大量のデータ入力を行うことができます。

図書室

共同利用研究機関としての当研究所は、アジア・アフリカ諸地域の言語・文化の研究に必要な基礎資料を1964年の創設以来毎年購入し、また海外研究機関との図書交換を通じて190誌の定期刊行物、研究書・論文集等を収集しています。図書室の蔵書総冊数は1989年3月末現在で約60,500冊にのぼっています。

蔵書の中には、アジア・アフリカ諸地域の国語教育資料をはじめ、雑誌（約1,600種）、新聞（約60種）、世界各国語の聖書などが含まれていますが、洋雑誌の整備には特に力を入れ、機会あるごとにバックナンバーを購入し、できるだけ完本でそろえるよう努力を続けています。たとえば、19世紀末から1970年までのイランの主要新聞65種がマイクロフィルム化されているほか、19世紀末に創刊されたベンガル語の文芸雑誌のバックナンバーを多数そろえており、又トルコ官報（オスマン帝国及び共和国）が1831年以降ほぼ完全にそろっているなど、他の研究機関には見られぬ資料が所蔵されています。

またラングーン大学より寄贈されたビルマ語の文献資料（1,950冊）をはじめ、東アジア・東南アジア・南アジア・西アジア・中近東・アフリカ・西欧・東欧・ソ連邦・太平洋地域におけるそれぞれの現地語で書かれた資料が数多くあり、当研究所図書室の特色の一つとなっています。また研究所の特色あるコレクションとして、次のような文庫があります。

①. 山本文庫（1967年受入）

著名な満洲語学者であった故山本謙吾元跡見学園短期大学教授（1920～65）の個人蔵書で、満洲語・ツングース語関係の諸文献を中心に言語学・音声学・アルタイ語学等に関する諸文献（和書・洋書合計598冊）が含まれる。

②. 浅井文庫（1970年受入）

これは、A A 研の元運営委員でありかつ著名なオストロネシア言語学者であった故浅井恵倫博士（1895～1969）の戦後集められたアジア・アフリカ諸言語の研究書・辞典類（和書・洋書合計191冊、文書18葉）を始め、同博士が台湾より持ち帰られた高砂族に関する貴重な言語資料（図書・ノート・写真類・未完未発表の高砂族伝説集総索引カード等）が含まれている。この写真類の中には、世界的に貴重なキリスト教資料「スピリチュアル修行（Spiritual Xuguo）」の原本を写した35ミリフィルムが含まれているが、研究者の便宜を考え現在その複製フィルムは国文学研究資料館に置かれてある。「スピリチュアル修行」の原本は、長崎とマドリードに1冊ずつ、世界に僅か2冊しか現存しないという稀観本であるが、戦前には実はもう1冊マニラにあって、俗に「マニラ本」と呼ばれていた。しかしこの「マニラ本」は戦禍により焼失してしまい、浅井博士の撮られた写真を通してしか今はその原形を知り得なくなっている。

③. 小林文庫（1976年受入）

著名な蒙古史の研究者である小林高四郎元横浜国立大学教授（1905～87）の個人蔵書で、蒙古民族の生活と習俗に関する文献（和書、洋書合計1,671冊）が含まれている。

④. 前嶋文庫（1986年受入）

わが国におけるイスラム研究の創立者の一人である前嶋信次元慶應大学教授（1903～83）の個人蔵書のうち、和漢書1,272冊を受入れたもの。イスラム関係のみならず、東洋史、東西交渉史、旅行記など広範な分野にわたる貴重なコレクションである。戦前に刊行され、今では珍らしくなった図書も少なくない。

音 声 学 実 験 室

「ヨルバ語のトーンなんですが、基本周波数の動きは？」

「広東語の声調の上がり下がりを目で見て確かめたいんですが……」

「フラン語ってどんなことばですか？実際に録音したものがありますか？」

「言語研修に使う教材を、良い条件で録音したいんだけど……」

こんな例は、音声学実験室の活動のほんの一部分にすぎません。サウンド・スペクトログラフやピッチ・インディケーターをはじめとした音声分析用機器が、フィールド調査で収集された音声資料の処理にあたっています。

音の性質・特徴やその調音状態を観察し記録するために、次のような分析機器が用意されています。サウンド・スペクトログラフは、音波を周波数分析して、その各時点ごとの音波の構成要素をとりだして特殊用紙上に濃淡模様で表示してくれます。周波数分析には用途に応じてワイドバンドとナローバンドがあります。ワイドバンドでの濃淡模様は各音の長さと共にそれぞれの様々な音色を示してくれ、ナローバンドでは各音の長さと共に音の高低変化を示してくれます。このような分析を通して未知の表現し難い音声を定めた規準のもとで表現可能にしたり、またその調音状態を推測する手助けを与えてくれます。ピッチ・エクストラクターは、音の経過時間にしたがって各時点での基本周波数や音の強弱の度合を分析し、ブラウン管面上に表示してくれます。またその管面の表示を特殊紙上にコピーすることもできます。管面表示の最大時間長は10秒ですので、単語の分析のみならず小文のイントネーションの分析もできます。さらに長時間にわたる連続音声の記録のためにフォトコーダーがピッチ・エクストラクターと共に用いられています。フォトコーダーは、極めて詳細な音声データーの観察のため、音声波を直接表示・記録することにも用いられています。エレクトロ・バラトグラフは、舌の調音運動を直接に観察し記録するための機器のひとつです。32個の微小な電極を埋めこんだ人工口蓋を発話者の口蓋にはめて、電極と舌との各時点ごとに変化する接触状態を、機械の前面パネルに口蓋状に配列した32個の小ランプの点滅により表示してくれます。また、この点滅表示を特殊用紙に記録することもできます。

このほかに、オープンリールテープ・カセットテープを高速にコピーするテープ・デュプリケーターが、言語研修用テープの作製やフィールド調査などで収集されたテープのコピーのために用意されています。また良好な条件でオリジナルテープを録音するために、防音室や各種のテープレコーダーやマイクロフォンが用意されています。

付属施設の“音声・言語研修資料室”には、フィールド調査で集められた世界のめずらしい言語や貴重な民話・民族音楽などのテープをはじめ、言語研修のテキストやテープ、各種の語学レコード・テープが整理保管され、研究者の利用の便をはかっています。



出版物一覧

下記の出版物は非売品ですが、著者あるいは編集出版委員会の承認により、研究機関、個人研究者に寄贈することができます。

なお、*印のものは在庫がありません。

アジア・アフリカ言語文化研究 *Journal of Asian and African Studies*, Nos. *1(1968), *2(1969), *3(1970), *4(1971), *5(1972), *6(1973), *7(1974), *8(1974), *9(1974), *10(1975), *11(1976), *12(1976), *13(1977), 14(1977), 15(1978), 16(1978), 17(1979), 18(1979), 19(1980), *20(1980), *21(1981), *22(1981), *23(1982), 24(1982), *25(1983), *26(1983), *27(1984), 28(1984), 29(1985), *30(1985), 31(1986), 32(1986), 33(1987), 34(1987), 35(1988), 36(1988), 37(1989).

アジア・アフリカ言語文化研究所 通信, Nos. 1~65. (1966~1989).

アジア・アフリカ言語文化叢書

1. ピア・アヌマーン・ラーチャトン著・河部利夫訳註, タイ農民の生活, 1967.
- *2. 島島彦一訳註, イブン・ファドラーのウォルガ・ブルガール旅行記, 1969.
3. MATSUSHITA, S., *An Outline of Gwandara Phonemics and Gwandara-English Vocabulary*, 1972.
4. NAKANO, A., *Conversational Texts in Eastern Neo-Aramaic (Gzira Dialect)*, 1973.
- *5. TSUCHIDA, S., *Reconstruction of Proto-Tsouic Phonology*, 1976.
- *6. NGATA, Y., *Muhsin-zâde Mehmed Paşa ve Âyânlik Müessesesi*, 1976.
7. YAJIMA, H., *A Chronicle of the Rasûlid Dynasty of Yemen*, 1976.
8. McFARLAND, Curtis D., *A Provisional Classification of Tagalog Verbs*, 1976. (1970)
9. McFARLAND, Curtis D., *Northern Philippine Linguistic Geography*, 1977.
10. HASHIMOTO, M. J., *Phonology of Ancient Chinese*, Vol. 1, 1978.
11. HASHIMOTO, M. J., *Phonology of Ancient Chinese*, Vol. 2, 1979.
12. KAWADA, J., *Genèse et évolution du système politique des Mosi mérédionaux (Haute Volta)*, 1979.
13. BAUTISTA, Maria L., *Patterns of Speaking in Pilipino Radio Dramas: A Sociolinguistic Analysis*, 1979.
14. 石井 淳, ネワール村落の社会構造とその変化——カースト社会の変容——, 1980.
15. McFARLAND, Curtis D., *A Linguistic Atlas of the Philippines*, 1980.
16. YADAV, Kripal C., *Elections in Panjab: 1920-1947*, 1981.
17. EL-ARABY, Salah A., *Teaching Foreign Languages to Arab Learners—Methods and Media—*, 1983.
18. KAWADA, J., *Textes historiques oraux des Mosi mérédionaux (Burkina-Faso)*, 1985.
- *19. MIZUSHIMA, T., *Nattar and the Socio-Economic Change in South India in the 18th-19th Centuries*, 1986.
20. 中嶋幹起, 湘方言調査報告 上冊, 1987.
21. TUNCOKU, A. M., *Japonya' nin çin Halk Cumhuriyeti'ne Karsi Politikası*, (1952~1978).
22. BALLARD, W. L., *The History and Development of Tone Alternations in South China*, 1988.
23. ENRIQUEZ, V. G., *Indigenous Psychology and National Consciousness*, 1989.

アジア・アフリカ基礎語彙集

1. 山本謙吾, 滿州語口語基礎語彙集, 1969.
- *2. 梅田博之, 現代朝鮮語基礎語彙集, 1971.
- *3. 橋本萬太郎, 客家語基礎語彙集, 1972.
4. 和田正平, イラク語基礎語彙集, 1973.
5. 石垣幸雄, エチオピア比較語句集, 1974.
6. 守野庸雄, スワヒリ語基礎語彙用例集, 1975.
7. 坂本恭章, モン語語彙集, 1976.
8. 中嶋幹起, 閩語東山島方言基礎語彙集, 1977.
9. 奈良 裕, *Avahattha and Comparative Vocabulary of New Indo-Āryan Languages*, 1979.
10. 中嶋幹起, 福建漢語方言基礎語彙集, 1979.
11. 橋本萬太郎, ペエ語語彙集, 1980.
12. 新谷忠彦, ラデ語-ベトナム語-日本語語彙, 1981.
13. 蔡 司郎, アソイ語基礎語彙集, 1981.
14. 中嶋幹起, 浙南吳語基礎語彙集, 1983.
15. 湯川恭敏, サンバ一語語彙集, 1984.
16. 梶 茂樹, *Lexique Tembo I: Tembo-Swahili du Zaïre-Japonais-Français*, 1986.
17. 辻 伸久, 湖南省南部中国語方言語彙集, 1987.
18. 橋本萬太郎, 納西語料, 1988.
19. 中嶋幹起, 山東方言基礎語彙集, 1989.

外 国 人 研 究 者 出 版 物

1. CONSTANTINO, E., *Isinay Texts and Translations*, 1982.
2. EL-ARABY, S. A., *Intermediate Egyptian Arabic—An Integrative Approach*, 1983.
3. 札奇斯欽, 我所知道的德王和當時的內蒙古 (一), 1985.
4. 馬 真 他, 西南官話基本文型の記述, 1986.
5. DOWNS, J. F., *Tibetan Pilgrimage*, 1987.
6. 賀巍, 汉語方言文稿集, 1987.
7. 李榮, 渡江書十五音, 1987.
8. 侯精一, 晉語研究, 1989.

共 同 研 究 報 告

1. アジア・アフリカ諸国における国語教育資料の調査研究——中間報告, 1966.
アジア・アフリカ諸国——国語教育資料目録, 1967.
2. アジア・アフリカ言語調査票, 上(1966), 下(1967),
3. 「イスラム化」に関する共同研究報告, Nos. *1(1968), *2(1969), *3(1970), 4(1971), 5(1972), *6(1973), 7(1982), 8·9(1986).
4. 現代インド・パキスタン文学共同研究報告, Nos. 1(1970), 2(1971), 3(1972).
- *5. アジア・アフリカにおける宗教運動共同研究報告, Nos. *1(1972), *2(1972), *3(1973).
6. アジア・アフリカ文法研究, Nos. *1(1972), 2(1973), 3(1974), 4(1975), 5(1976), 6(1977), 7(1978), 8(1979), 9(1980), 10(1981), 11(1982), 12(1983), 13(1984), 14(1985), 15(1986), 16(1987), 17(1988).
7. *Asian and African Grammatical Manual* (アジア・アフリカ文法便覧), 1972~:
No.*11. Korean (梅田博之), 1973.
11z. Ainu (村崎恭子), 1978.
*12b. Fukienese (中嶋幹起), 1976.
*12z. Tibetan (北村 甫), 1977.
13. Indo-Aryan (石垣幸夫), 1980
13a. Hindi (溝上富夫), 1980.
*13b. Marathi (内藤雅雄), 1976
13c. Bengali (奈良 肇), 1979.
13d. Khaling (鳥羽季義), 1979, 1984.
13e. Panjabi (溝上富夫), 1981.
13x. Tamil (徳永宗雄), 1981.
13y. Malayalam (伊藤正二), 1978.
*14a. Cambodian (坂本恭章), 1974.
*14b. Burmese (蔽 司郎), 1974.
14c. Thai (森 幹男), 1975, 1984.
*15b. Philippine (山田幸宏, 土田 滋), 1975, 1983.
*16b. Samoan (小田真弘), 1977.
8. アフリカ部族社会の比較研究: 1. アフリカ部族社会の特質をめぐって(1971), *2. アフリカ社会の地域性(1973)
- *9. トルコ民族とイスラムに関する共同研究報告, 1(1974).
10. アジア・アフリカ語の計数研究, *1(1975), *2(1975), *3(1976), *4(鄒 嘉彦, 老乞大諺解单字索引, 1976), *5(坂本恭章, カンボジア語小辞典, 1976), *6(1976), *7(1977), *8(1978), *9(1978), *10(1979), *11(1979), *12(YUE, Anne O., *The Teng-xian Dialect of Chinese*, 1979), *13(1980), *14(藍清漢, 中国語宜蘭方言語彙集, 1980), 15(SHERARD, Michael, *A Synchronic Phonology of Modern Colloquial Shanghai*, 1980), 16(1981), *17(傅懋勣, 納西族图画文字《白蝙蝠取經記》研究〈上冊〉, 1981), 18(徐琳·木玉璋, 傈僳族《創世記》研究, 1981), 19(1982), 20(SHERARD, Michael, *A Lexical Survey of the Shanghai Dialect*, 1982), 21(1983), *22(1984), 23(傅懋勣, 納西族图画文字《白蝙蝠取經記》研究〈下冊〉, 1984), 24(1985), 25(ポール K. ベネディクト, 突破口: 東南アジアの言語から日本語へ——日の神の民の起源, 1985), 26(1986), *27(徐琳, 白族《黃氏女対經》研究, 1986), 29(1987), 29(徐琳, 白族《黃氏女対經》研究〈続〉, 1988), 30(1988).

- *11. *Oceanic Studies*, No.1(1976).
- *12. インド・パキスタン分離独立の史的研究 資料集 *1(1976), *2(1977).
- 13. 南アジアの大河流域における農村社会の研究：南アジア農村社会の研究, 1(1977), 2(1978), 3(1979), 4(1979), 5(1980), 6(1985), 7(1987), 8(1987).
- 14. ヒマラヤ・チベットの生態・言語・文化に関する総合研究：YAK, *1(1977), 2(1978), 3(1979), 4(1980), 5(1981), 6(1982), 7(1983), 8(1987).
- 15. アフリカ社会の形成と展開—地域・都市・言語 (1980).
- 16. 日本の言語文化研究プリント・シリーズ, Nos. 1(飯島 茂, 日本からみた "Thailand: A Loosely Structured Social System", 1981), 2(岡田英弘, 中国のなかの日本, 1982).
- 17. *Phraseological Questionnaire*, Vol. 1 No.1~2. (*Aquatic Idiomatics*, 1982), Vol. 3, No. 1(*Proverbial*, 1981).
- 18. *Performance in Culture*, No. 1(BEEMAN, William O., *Culture, Performance and Communication in Iran*, 1982), *No.2 (AWASTHI, Suresh, *Drama : The Gift of Gods—Culture, Performance and Communication in India*, 1983), *No. 3(NAGASHIMA, Y. S., *Rastafarian Music in Contemporary Jamaica—A Study of Socioreligious Music of the Rastafarian Movement in Jamaica*. 1984), No.4 (AND, METIN, *Culture, Performance and Communication in Turkey*, 1987).
- 19. *Nationalism in Asia and Its International Relations*, No. 1 (*Transformation and Peasant Movements in Contemporary Asia*, 1985), No. 2 (アジア政治の展開と国際関係, 1986).
- 20. 象徴と世界観研究叢書, No. 1(高知尾仁, 球体遊戯, 1986), No. 2 (橋本裕之, 春日若宮おん祭と奈良のコスモロジー, 1986).
- 21. 南アジアにおける社会集団形成過程に関する比較研究, No. 1(柳沢 悠, 水島 司, 20世紀初め南インドにおけるカーストと土地保有構造の変動, 1988), No. 2 (KARASHIMA, N., SUBBARAYALU, Y. & SHANMUGAM, P., *Vijayanagar Rule in Tamil Country as revealed through a Statistical Study of Revenue Terms in Inscriptions*, 1988), No. 3 (KARASHIMA, N., SUBBARAYALU, Y. & SHANMUGAM, P., *Vijayanagar Rule in Tamil Country as revealed through a Statistical Study of Revenue Terms in Inscriptions, Part two (Appendix III)*, 1989).
- 22. 第三世界の大衆文化の研究, 1(原 忠彦, インド・マンガの世界観序論, 1988).
- 23. 多民族国家における異化・同化形態の比較研究：マレーシア社会論集, 1(1988).
- 24. *A Comparative Study on the Modes of Inter-Action in Multi-Ethnic Societies : Monograph Series*, No. 1 (FUJIMOTO, Helen, *The South Indian Muslim Community and the Evolution of the Jawi Peranakan in Penang up to 1948*, 1988).
- 25. AA研東南アジア研究, 1(世紀転換期における日本・フィリピン関係, 1989).
- 26. イスラム圏における異文化接触のメカニズム——市の比較研究——, 1 (1989).
- 27. 辞典編纂, 1 (1989).
- 28. 言語文化接触に関する研究, 1 (1989).

African Languages and Ethnography

- 1. EGUCHI, P.K., *Miscellany of Maroua Fulfulde (Northern Cameroun)*, 1974.
- 2. MATSUSHITA, S., *A Comparative Vocabulary of Gwandara Dialects*, 1976.
- 3. MOHAMMADOU, E., *L'Histoire des Peuls Férôrê du Diamaré : Maroua et Pétte*, 1976.
- 4. EGUCHI, P. K.,(tr.), *Shi'r al-Tūba (Poem of Repentance)*, 1976.
- 5. WADA, S., *Hadithi za Mapokeo ya Wairaqw (Iraqw folktales in Tanzania)*, 1976.
- 6. NAKANO, A., *Dialogues in Moroccan Shilha (Dialects of Anti-Atlas and Ait-Warain)*, 1976.
- 7. TANAKA, J., *A San Vocabulary of the Central Kalahari-G/ana and G/ wi Dialects*, 1978.
- 8. MOHAMMADOU, E., *Les Royaumes Foulâ du Plateau de L'Adamaoua au XIX siècle*, 1978.
- 9. MATSUSHITA, S., *In a Small Town on the Benue—Fula Texts from Gongola State, Northern Nigeria*, 1978.
- 10. HINO, S., *The Classified Vocabulary of the Mbam Language in Mbang Mboum—with Ethnographical Descriptions*, 1978.
- 11. EGUCHI, P.K., *Fulfulde Tales of North Cameroon I*, 1978.
- 12. MOHAMMADOU, E., *Catalogue des Archives Coloniales Allemands du Cameroun*, 1978.

13. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon II*, 1980.
14. MOHAMMADOU, E., *Le Royaume du Wandala ou Mandara au XIXe Siecle*, 1982.
15. EGUCHI, P.K., *Fulfulde Tales of North Cameroon III*, 1982.
16. NAKANO, A., *A Vocabulary of Beni Amer Dialect of Tigré*, 1982.
17. MOHAMMADOU, E., *Peuples et Royaumes du Foumbina*, 1983.
18. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon IV*, 1984.
19. KAJI, S., *Deux Mille Phrases de Swahili Tel Qu'il Se Parle au Zaïre*, 1985.
20. MOHAMMADOU, E., *Traditions D'Origine des Peuples du Centre et de L'Ouest du Cameroun*, 1986.
21. EGUCHI, P. K., *An English-Fulfulde Dictionary*, 1986.
22. MOHAMMADOU, E., *Lamidats du Diamare et du Mayo-Louti au XIXe Siecle*, 1988.

Monumenta Serindica

1. IJIMA, S. (ed), *Changing Aspects of Modern Nepal—Relating to the Ecology, Agriculture and Her People*, 1977.
2. HASHIMOTO, M. (compl.), *The Newari Language—A Classified Lexicon of its Bhadgaon Dialect*, 1977.
3. KITAMURA, H. (ed.), *Glo Skad—A Material of a Tibetan Dialect in the Nepal Himalayas*, 1977.
4. MATISOFF, J. A., *Mpi and Lolo-Burmese Microlinguistics*, 1978.
5. HOSHI, M. & Tondup Tsiring, *Zangskar Vocabulary—A Tibetan Dialect Spoken in Kashmir*, 1978.
6. KITAMURA, H., NISHIDA, T. & NISHI, Y. (ed.), *Tibeto-Burman Studies I*, 1979.
7. NAGANO, Y., *Amdo Sherpa Dialect—A Material for Tibetan Dialectology*, 1980.
8. NISHIDA, T., *The Structure of the Hsi-hsia (Tangut) Characters*, 1980.
9. THURGOOD, G., *Notes on the Origins of Burmese Creaky Tone*, 1981.
10. BISTA, D. B., IJIMA, S., ISHII, H., NAGANO, Y. & NISHI, Y., 1982. *Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal*, 1982.
11. KARAN, P.P., PAUER, G., & IJIMA, S., *Map—The Kingdom of Nepal*, 1983.
12. TACHIKAWA, M., MIKAME, K., HOSHI, M., NAGANO, Y., *Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal. II*, 1984.
13. KARAN, P.P., PAUER, G., & IJIMA, S., *Sikkim Himalaya Development in Mountain Environment*, 1984.
14. MALLA, K. P., *The Newari Language ; A Working Outline*, 1985.
15. ISHII, H., TACHIKAWA, M., NAKAZAWA, S., NAGANO, Y., HOSHI, M., *Anthropological and Linguistic Studies of the Kathmandu Valley and the Gandaki Area in Nepal*, 1986.
SHARMA, P. R., 三瓶清朝, 山本勇次, ネパールにおける言語・文化・社会の動態, 1986.
16. SUN, J. T.-S., *Aspects of the Phonology of Amdo Tibetan : Ndzorge Šæme Xrra Dialect*, 1986.
17. KARAN, P. P., PAUER, G. & IJIMA, S., *Bhutan : Development amid Environmental and Cultural Preservation*, 1987.
18. EINO, S., *Die Cāturmāsya Odea Die Altindischen Tertialopfer Dargestellt Nach Den Vorschriften Der Brāhmaṇas und Der Śrautasūtras*, 1988.
19. SUWA, T., *Two Essays on the Formation of the East Asian Ethnic World*, 1989.

Studies in Socio-cultural Change in Rural Villages in India

1. KARASHIMA, N., SUBBARAYALU, Y. & SHANMUGAM, P., *Land Control and Social Change in the Lower Kaveri Valley from the 12th Centuries*, 1980.
2. HARA, T. & KOMOGUCHI, Y., *Socio-Economic Studies of Two Villages Esnakorai and Peruvanallur, Lalgudi Taluk*, 1981.
3. 柳沢 悠, 南インド・カーヴェリ河流域の農村社会の史的変容——アバドゥライ村の土地所有関係を中心にして——, 1981.
4. SUBBIAH, S., MIZUSHIMA, T., NARA, T., *Socio-Economic Studies of Two Villages; Mahizambadi and Naykulam, Lalgudi Taluk*, 1981.
5. NAKAMURA, H., *Disintegration and Re-integration of a Rural Society in the Process of Economic Development—The Second Survey of a Tank-based Village in Tamil Nadu—*, 1982.

Studia Culturae Islamicae

1. NAKANO, A., *Basic Vocabulary in Standard Somali (I)*, 1976.
2. MIKI, W., *Index of the Arab Herbalist's Materials*, 1976.
3. YAJIMA, H., *The Arab Dhow Trade in the Indian Ocean*, 1976.
4. NAGATA, Y., *Some Documents on the Big Farms (Çiftlik) of the Notables in Western Anatolia*, 1976.
5. MIYAJI, K., "Kacem Ali"—*Monographie d'un domaine autogéré de la plaine de Mitidja (Algérie)*, 1976.
6. MIYAJI, M., *L'Emigration et le changement socio-culturel d'un village Kabyle (Algérie)*, 1976.
7. MIKI, W. & 'Abd al-Rahim., *Village in Ottoman Egypt and Tokugawa Japan—A Comparative Study*—, 1977.
8. MIKI, W., HONDA G. & M. Salah Ahmed, *Herb Drugs and Herbalists in the Middle East*, 1979.
9. 上岡弘二, 家島彦一, インド洋西海域における地域間交流の構造と機能—ダウ調査報告2—, 1979.
10. KAMIOKA, K. & YAMADA, M., *Lārestāni Studies I. Lāri Basic Vocabulary*, 1979.
11. NAGATA, Y., *Materials on the Bosnian Notables*, 1979.
12. SHIMIZU, K., *Bibliography on Saljuq Studies*, 1979.
13. HANEDA, K., *Tabrizi Vocabulary an Azeri-Turkish Dialect in Iran*, 1979.
14. NAKANO, A., *Report on Moroccan Urban and Rural Life 1—Ethnographic Texts in Moroccan Arabic*—, 1979.
15. TSUGE, Y., *Ethnographical Texts in Amharic (1)*, 1982.
16. YAJIMA, H., *The Islamic History of the Maldives Islands by Hasan Taj al-Din (D. 1139 A.H. / 1727 A.D.)*, Vol. 1 (Arabic Text), Ed. & Notes, 1982.
17. NAKANO, A., *Somali Folktales (1)—Texts in Somali [1]*—, 1982.
18. NAKANO, A., *Folktales of Lower Egypt (1)—Texts in Egyptian Arabic [1]*—, 1982.
19. MIKI, W., HONDA, G. & BELLAKHDAR, J., *Herb Drugs and Herbalists in the Maghrib*, 1982.
20. YAMAGATA, T., *Coptic Monasteries at Wadi al Natrun in Egypt—From the Field Notes on the Coptic Monks' Life*—, 1983.
21. BAYKARA, T., *Yatağan—Her Şeyi İle 'Tarihi Yaşatma Denemesi'*—, 1984.
22. YAJIMA, H., *The Islamic History of the Maldives Islands by Hasan Taj al-Din*, Vol.2, Annotations and Indices, 1984
23. NAGHIZADEH, M., *The Role of Farmer's Self-Determination, Collective Action and Cooperatives in Agricultural Development—A Case Study of Iran*, 1984.
24. ABDULSALAM, A., *The Rural Geographical Environment of the Syrian Coastal Region and the Shizuoka Region : A Comparative Study of Syria and Japan*, 1985.
25. ABDULSALAM, A., *Adighean (Western Circassian) Vocabulary*, 1985.
26. TSUGE, Y., *Ethnographical Texts in Amharic (2)*, 1985.
27. MIKI, W., *Herb Drugs and Herbalists in Turkey*, 1986.
28. MIKI, W., *Herb Drugs and Herbalists in Pakistan*, 1986.
29. NAKANO, A., *Comparative Vocabulary of Southern Arabic (Mahri, Gibbali and Soqotri)*, 1986.
30. KAMIOKA, K., RAHBAR, A. & HAMIDI, A. A., *Comparative Basic Vocabulary of Khonji and Lari—Lārestāni Studies 2—*, 1986.
31. 家島彦一, Arwād島——シリア海岸の海上文化——, 1986.
32. TAKESHITA, M., *Ibn 'Arabi's Theory of the Perfect Man and Its Place in the History of Islamic Thought*, 1987.
33. HAYASHI, T., *A Turkish Dialect in North-Western Anatolia—Bolu Dialect Materials*—, 1988.
34. PARSINEJAD, I., *Mirza Fath Ali Akhundzadeh and Literary Criticism*, 1988.
35. SATO, T., *The Syrian Coastal Town of Jabala—Its History and Present Situation*—, 1988.
36. 家島彦一, 上岡弘二, イラン・ザグロス山脈越えのキャラバン・ルート, *IRANIAN STUDIES 1*, 1988.
37. 上岡弘二, 羽田亨一, 家島彦一, ギーラーンの定期市——1986年度予備調査報告—, *IRANIAN STUDIES 2*, 1988.
38. HAKAMI, N. F., *Pèlerinage de L'Emâm Rezâ*, 1989.

Socio-cultural Change in Villages in India

1. KARASHIMA, N., *Pre-modern Period*, 1983.
2. *Modern Period*, No. 1 (HARA, T., MIZUSHIMA, T. & NAKAMURA, H. 1983), No. 2 (KOMOGUCHI, Y. & YANAGISAWA, H. 1983), No. 3 (KOMOGUCHI, Y. 1984).

Studies in Socio-cultural Change in Rural Villages in Bangladesh

- | | |
|-------------------------------------|-----------------------------------|
| 1. HARA, T., & UMITSU, M., 1985. | 5. CHOWDHURI, A., 1987. |
| 2. FAROUK, A., 1985. | 6. TANIGUCHI, S., 1987. |
| 3. TANIGUCHI, S., & SATO, H., 1985. | 7. SATOH, T., & UMITSU, M., 1987. |
| 4. ISLAM, S., 1985. | 8. FAROUK, A., 1987. |

South Asian Monograph

1. KAWAI, A., '*Landlords' and Imperial Rule : Change in Bengal Agrarian Society C 1885.-1940*, Vol. 1, 1986, Vol. 2, 1987.
2. 水島 司, 南インド在地社会の研究, 1987.

Sudan Sahel Studies

1. TOMIKAWA, M. (ed.), 1984.
2. TOMIKAWA, M. (ed.), 1986.

Bantu Vocabulary Series

1. YUKAWA, Y., *A Classified Vocabulary of the Mwenyi Language*, 1987.
2. YUKAWA, Y., *A Classified Vocabulary of the Nkoya Language*, 1987.
3. KAGAYA, R., *A Classified Vocabulary of the Lungu Language*, 1987.
4. KAGAYA, R., *A Classified Vocabulary of the Lenje Language*, 1987.
5. YUKAWA, Y., *A Classified Vocabulary of the Nilamba Language*, 1989.
6. KAGAYA, R., *A Classified Vocabulary of the Pare Languages*, 1989.

Bantu Linguistics (ILCAA)

1. *Studies in Zambian Languages*, 1987.
2. *Studies in Tanzanian Languages*, 1989.

Boucle Du Niger

1. KAWADA, J., 1988.

AA-Ken Caribbean Study Series

1. YAMAGUCHI, M. & NAITO, M. (ed.), *Comparative Studies on the Plural Societies in the Caribbean*, 1985.
2. VERNON, D., *Money Magic in a Modernizing Maroon Society*, 1985.
3. YAMAGUCHI, M. & NAITO, M. (ed.), *Social and Festive Space in the Caribbean : Comparative Studies on the Plural Societies in the Caribbean*, Vol. 2, 1987.

言語研修テキスト

- *1. チベット語, 北村 甫ほか編, 全5冊(1974).
- *2. 朝鮮語, 梅田博之ほか編, 全3冊(1974).
- *3. カンボジア語, 坂本恭章ほか編, 全5冊(1975).
- *4. ベンガル語, 奈良 穀編, 1冊(1975).
- *5. ピルマ語, 大野 徹ほか編, 全5冊(1976).
- *6. ペルシア語, 上岡弘二ほか編, 全3冊(1976).
- *7. スワヒリ語, 守野庸雄ほか編, 全2冊(1976).
- *8. 広東語, 中嶋幹起ほか編, 全4冊(1977).
- *9. マラーティー語, 内藤雅雄ほか編, 全3冊(1977).
- *10. モンゴル語, 荒井伸一ほか編, 全4冊(1977).
- *11. トルコ語, 永田雄三ほか編, 全3冊(1978).
- *12. タイ語, 坂本恭章ほか編, 全2冊(1978).
- 13. ペルシア語, 勝藤 猛ほか編, 全3冊(1987).
- 14. ハウサ語, 松下周二ほか編, 全3冊(1979).
- *15. ピルマ語, 蔡 司郎編, 全3冊(1979).
- *16. ネパール語, 石井 淳ほか編, 全3冊(1980).
- *17. モンゴル語, 小沢重男ほか編, 全2冊(1980).
- 18. ベトナム語, 川本邦衛ほか編, 全4冊(1980).
- 19. 中国語, 大河内康憲編, 1冊(1981).
- *20. ヒンディー語, 田中敏雄ほか編, 全3冊(1981).
- 21. パシュトー語, 繩田鉄男編, 全3冊(1981).
- *22. アラビア語, 中野暁雄, サラーフ・アル・アラビー編, 全2冊(1982).
- 23. ハンガリー語, 岩崎悦子ほか編, 全2冊(1982).
- *24. チベット語, 北村 甫ほか編, 全3冊(1983).
- *25. フィンランド語, 松村一登ほか編, 全3冊(1983).
- 26. パンジャーブ語, 溝上富夫編, 全3冊(1983).
- *27. ピリピノ語, 池端雪浦, リリア・アントニオ編, 全2冊(1984).
- 28. ヨルバ語, 清水紀佳ほか編, 全2冊(1984).
- 29. トルコ語, 勝田 茂編, 全3冊(1984).
- 30. 朝鮮語, 大江孝男編, 全3冊(1985).
- 31. カンボジア語, 坂本恭章ほか編, 全4冊(1985).
- 32. スワヒリ語, 宮本正興ほか編, 全5冊(1985).
- 33. 西南官話, 橋本萬太郎, 馬真ほか編, 全2冊(1986).
- 34. タミル語, 山下博司ほか編, 全2冊(1986).
- 35. ベンガル語, 溝上富夫ほか編, 全3冊(1986).
- 36. 中原官話, 中嶋幹起, 賀巍ほか編, 1冊(1987).
- 37. タイ語, 森 幹男ほか編, 全4冊(1987).
- 38. シシハラ語, 中村尚司ほか編, 全3冊(1987).
- 39. インドネシア語, 森村 蕎ほか編, 全3冊(1988).
- 40. ペルシア語, 上岡弘二ほか編, 全4冊(1988).
- 41. トルコ語, 林 徹ほか編, 全4冊(1988).

資料1. スワヒリ語<三日坊主コース>テキスト, 守野庸雄編, 1冊(1985).

特定研究「言語」出版物

「文字と言語」研究資料

- *1. HASHIMOTO, M. J., *hP' ags-pa Chinese*, 1978.
- 2. 橋本萬太郎編, 東干語文字の音表化(資料集), 1978.
- *3. 橋本萬太郎編, ラテン化新文字(資料集), 1978.
- 4. 川本邦衛, 現代ベトナム語 漢語・「漢字語」語彙集(I), 1979.
- 5. SCHAANK, Simon H., *The Lu-Feng Dialect of Hakka*, 1979.
- 6. 吉田 忠, 蘭学における訳語の考察, 1980.
- 7. 川本邦衛, 現代ベトナム語 漢語・「漢字語」語彙集(II), 1980.

「A A 諸言語と日本語の学習」資料

- *77-1. 梅田 博之: 基本動詞対照用例集 日本語—朝鮮語1, 1978.
- *77-2. 大河内康憲: 基本動詞対照用例集 日本語—中国語1, 1978.
- *77-3. 坂本 恭章: 基本動詞対照用例集 日本語—タイ語1, 1978.
- *78-1. 梅田 博之: 基本動詞対照用例集 日本語—朝鮮語2, 1979.
- *78-2. 大河内康憲: 基本動詞対照用例集 日本語—中国語2, 1979.
- *78-5. 奈良 穀: 基本動詞対照用例集 日本語—ヒンディー語1, 1979.
- *78-6. 内記 良一: 基本動詞対照用例集 日本語—アラビア語1, 1979.
- *78-7. 守野 庸雄: 基本動詞対照用例集 日本語—スワヒリ語1, 1979.
- 78-8. 梅田博之ほか: 助詞対照用例集1:「の」 日本語—A A 諸言語, 1979.
- *79-1ab. 梅田博之ほか: 日本語の発音(朝鮮語を母語とする学習者のための日本語発音教材試案), 1980.
- *79-3. 坂本 恭章: 基本動詞対照用例集 日本語—タイ語2, 1980.

- *79-5. 奈良 毅：基本動詞対照用例集 日本語—ヒンディー語2, 1979
79-6. 内記 良一：基本動詞対照用例集 日本語—アラビア語2, 1980.
*79-7. 守野 康雄：基本動詞対照用例集 日本語—スワヒリ語2, 1980.
79-8. 梅田博之ほか：A A諸言語教育基本語彙表, 1980.

一般研究出版物

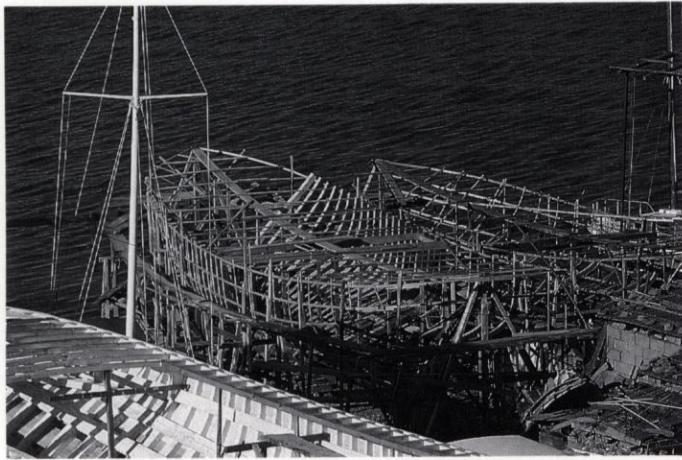
湯川 恭敏, サンバー語動詞のアクセント, 1983.

コンピュータ マニュアル シリーズ

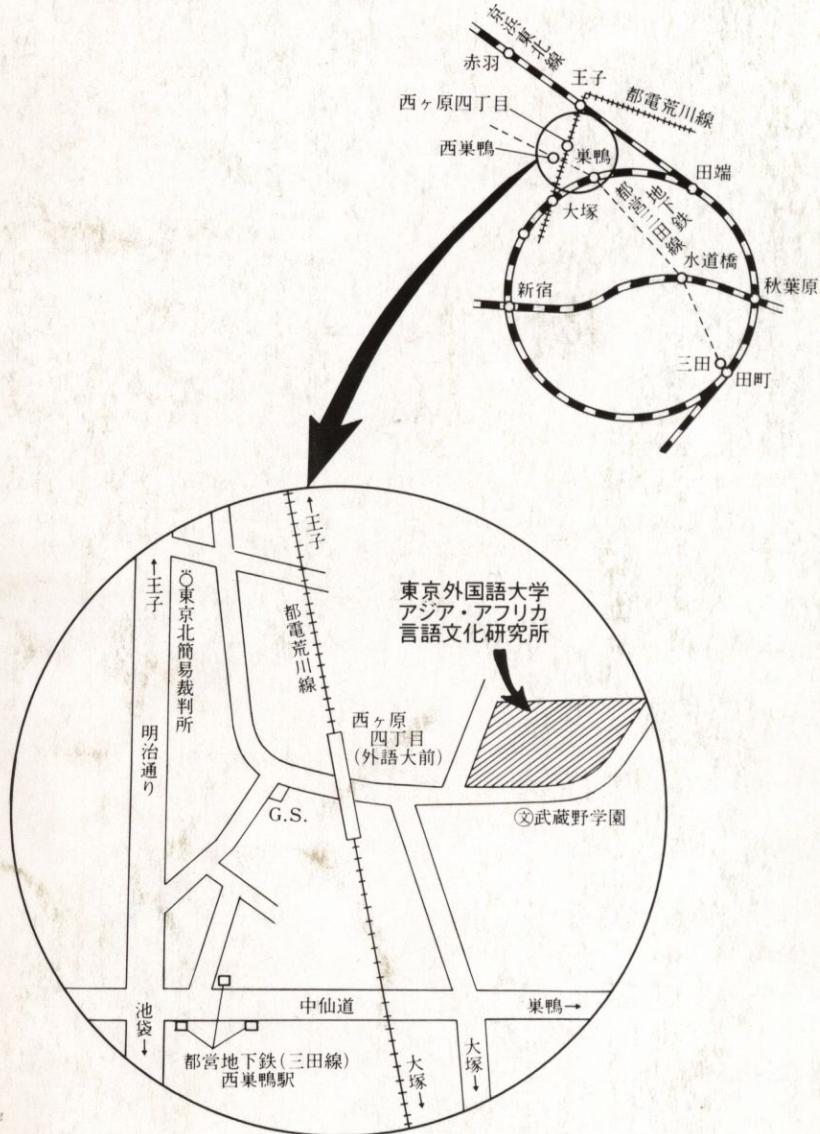
1. VSAMEDIT (テキストエディター) 松下周二 (1984).
 2. FONTPRO (文字フォント作製・修正) 今井健二 (1985).
 3. BUNPOO (文法: 文字コード変換) 今井健二 (1982).
 4. AAFE (文字フォントエディタ) 今井健二 (1985) (廃版).
 5. AATEDIT (各種言語テキストエディタ) 今井健二 (1985).
 6. 辞書検索表示プログラム 松下周二 (1986).
- 別冊1. 文字フォントリスト1 (1989).
別冊2. 文字フォントリスト2 (1988).

アジア・アフリカ言語データ シリーズ

1. 坂本恭章編, 近世アンコール碑文—KWIC索引, 1986.
2. MALLIK, B. P., NARA, T., SAKAMOTO, Y., *South-Asian Series—Bengali Language (1)*, 1987.
3. MALLIK, B. P., NARA, T., SAKAMOTO, Y., *South-Asian Series—Bengali Language (2)*, 1989.
4. SAKAMOTO, Y., *Austro-Asiatic Series—Khmer (2)*, 1989.



エーゲ海に臨むトルコのボドウルム港で建造中の大型木造船(スクーナ型帆船)。現在、この船はエーゲ海の観光船として使われているが、旧い船体構造をとどめている。
(家島彦一)



アジア・アフリカ言語文化研究所
東京外国语大学

東京都北区西ヶ原4丁目51番21号 〒114

TEL 03-917-6111 (代)

FAX 03-910-0613

J R 大塚又は王子下車・都電荒川線西ヶ原四丁目

(外語大前) から徒歩5分

地下鉄・都営三田線西巢鴨下車10分

